

基督教叢書

星野光多著

宗教の中心事実として

祈・禱

- 第一章 祈禱の天性
- 第二章 祈禱の事實
- 第三章 祈禱の應驗
- 第四章 祈禱の道理(甲)
- 第五章 祈禱の道理(乙)

目次

258

861

特

020716-000-3

特18-468

宗教の中心事実として

星野 光多/著

M41

ABI-0536



特 18
468

宗教の中心事實として祈禱



○紹介の辭

祈禱の本質は神との交通親善に外ならず、而して祈求是其の要素たる也。祈禱の大目的は、神の聖意を悟つて之に服従するに外ならず、而してその要求を得んとするが如きは必ずしも吾人の期すべき所にあらずる也。而も祈禱の本質中に要求願望の元素包有せらるる事、祈禱の大目的の中に祈禱應驗の豫期を包含せらるる事は、極めて明白なり。アブラハムの祈禱、モーセの祈禱、ダビデの祈禱、主キリストの祈禱、此等は、たゞ神を讚美し、その恩恵を祝謝する耳に止らず、彼等は、時として、その民のため、その家のため、その身のため、其事業のため、特別なる要求願望を以て神の聖坐に切迫したり。モーセに於て開かれたる猶太教によるも、キリストによりて傳へられたる基督教によるも、祈禱は一大實力として、人類は之に因て神より新なる祝福恩恵を得る也。而してその新なる祝福恩恵は、必ずしも心霊的にあらず、時として物質的たる也。必ずしも主観的ならず、時として客観的たる也。本書の著者は、祈禱の要素として、感謝讚美懺悔服従等の、最も重視すべきものなるを認むるも、要求願望の意味を以てせる祈禱の、吾人が徳性の發展のためにも、基督教的事業の成功の爲にも、極めて切要なるを感じずんばあらず。此書固より祈禱の注意に關する領分の全體を論じんとする者にあらず、只人間の生活に於ける一大力源として、祈禱の特性を示し、讀者をして、一層深く祈禱の効力を信じ、今更により、多く祈り熱く求る所の人となるを得せしめば、著者の目的は十全に達せられたる者なり。願くば讀者の上に「恩恵と祈禱の靈」の注がれんことを、アーメン。

明治四十一年八月十日

基督教叢書編者
星野光多

宗教の中心事實として祈禱

目次

第一章

祈禱の天性……………一

(一) 道徳家と宗教家の區別……………三

(二) 宗教と祈禱は人間の天性……………六

(三) 宗教及び祈禱に關する辯論の必用……………一〇

(四) 耶蘇の生活に於ける祈禱……………一三

(五) 祈禱は靈界に於ける一大勢力……………一七

第二章

祈禱の事實……………二一

第一 祈禱することの天下一般に行はれて居る事……………二三

第二 祈禱が人の道徳及事業の上に與へたる影響……………二八

目次

第三 祈禱に加へられたる應驗の確實である事……………三六
右の事實に因りて證明せらるゝもの

(甲) 宇宙組織に心靈的側面ある事……………四一
有意識的活神の存在し給ふ事……………四三

第二章 祈禱の應驗……………四九

第一 ヘンリー、ヤング、ステリングスが祈禱によりて

學業を仕遂げたる事……………五三

第二 切迫したる場合に祈りて助を得たる醫者の

事……………五七

第三 ルーテル祈つてメラクソンを起たしめたる事……………五九

第四 監督シンブソンの病患祈禱により癒されし

事……………六三

日曜學校の一组が悉く信者となりし事……………六三

有力なる牧師が聖靈のバプテスマを蒙りし事……………六七

シオージ、ミューレル只祈禱の力を信頼して一大孤兒院を創立し且つ之を維持せし事……………七〇

第四章 祈禱の道理……………七七

(甲) 自然法と神の意志の關係……………七九

物質的側面と心靈側面……………七九

下等動物の間に行はるる祈禱の原形……………八三

人間社會に行はるる祈禱の原形……………八五

家庭に行はるる祈禱の原形……………八六

目次

(五) 祈禱に關する耶蘇の教……………八九

(六) 結論……………九二

第五章 祈禱の道理……………九七

(一) (乙) 神の完全と人の自由意志の關係……………九九

誤解せられたる神の完全が疑惑の原因となる事……………九九

(二) 神の豫知と人の自由行為の關係狀態……………一〇三

(三) 右の關係を説明する假設の一例……………一〇八

(四) 右の關係を説明する實際の一例……………一一〇

(五) 結論……………一二二

目次終

第一章 祈禱の天性

第一章 祈禱の天性

宗教とは神と人との關係を土臺として、その上に成立つ事柄であつて、祈禱は其主腦部を爲せる者である。換言すれば、宗教の最も重要な要素は祈禱であつて、祈禱を有たぬ若くは之を重視せぬ宗教は、眞正の宗教と云ふことが出来ぬ。故に世間が宗教家として尊敬して居る者であつても、祈禱の素養なき人は、吾人の眼には眞の宗教家ではない。勿論彼は道徳家と稱することは出来ぬし、併し決して眞正の宗教家ではない。彼或は自己の道念や、審美心により、又は社會道徳の感化により、漠然と自ら敬神愛國を主義とし、且つ之を主張して居りはするも、其實際生活に於て、誠意誠心以て神を信仰し、又祈禱を勤めては居らぬ。彼は在來の習慣風俗に順ひて、神詣でもする、寺参りもするが、それは唯一片

の儀式禮讓にすぎぬので、眞實の心から祈禱禮拜をする者でない。吾人の祈禱と云ふのは、その相手とする所の神の活在を認識して、直接之に親近し、奉事し、且つ懇求することを云ふので、活意志を有する眞神の存在を認めぬ者には、兎ても出来ぬ事柄である。所が我國に於て、今日宗教家と稱せらるゝ者の中には、汎神的思想を懐いて居て、神の人格を認めぬ者が尠くない。彼等は無神説や唯物論ではどうも満足することが出来ぬ所から、萬有の中に神ある事を認むる併しその神が萬有より獨立して別格に存在して居ると云ふとは解らぬ。そこで彼等は神と萬有とを同一視する所の汎神説を以て、自らの心を満足させて居るのである。此の説に因ば、世に神として特に之を敬仰し、亦特に之に祈求すべき中心點は無のである。天も神の一部分であれば、地も亦其一部分である。草木禽獸もその一部分であれば、人類もまたその一部分であ

る。斯様な宗教思想を懐いて居る者には、兎ても誠實なる祈禱は出来ぬ。冥想とか、默想とか、座禪とか、勤行とか云ふことは出来ぬ。併しほんとうの祈禱は、兎ても出来ぬ、決して出来ぬ。それであるから、今日の學者にして宗教家と稱せられて居る者の中には、眞正の宗教家が尠ない。宗教を論議する者、賛成する者はあるが、眞に宗教を奉ずる者、祈禱を勤むる者は尠ないのである。甚だしきに至つては、彼等の或者は自ら宗教家と自任して居に拘らず、祈禱を以て迷信事と思ふて居る。害はないが、併し別に益もない遊事と思ふて居る。此は汎神思想の佛教側の宗教家にあり勝のとであるが、人格的神を認て居る基督教側の所謂宗教家の中にも尠くない。此は彼等が汎神論にかぶれたからと云ふとも出来るが、それより強い原因は、自然法の過信である。此種類のクリスチャンは宗教の事をよく知て居る、論じて

二二 宗教の性
二二 宗教の性
二二 宗教の性

居る。併し自家日常生活に於ては、祈禱を度外に置く。彼等は聖書の研究は爲が、祈禱は爲ぬ。説教演説は、聴もし、爲もするが、祈禱は爲ぬ。彼等は、祈禱は下流宗教家の事とする所で、進歩したる宗教家、進歩したる基督教徒には不似合の事である。斯う思て居る。併し此等の人々は實際の所る大に過つて居ると云はねばならぬ。前に述べた如く、宗教とは神と人との關係を土臺として、其上に成立つ所の事柄であつて、畧言すれば、神と人との交通親善に外ならないのである。而して此交通親善こそ祈禱の本質である。然るに、未だ祈禱の眞味を味ふたことのない人が、どうして眞正の宗教家と云はれよう歟。抑も宗教なるものは、人間の自然に發して行はるゝものであつて、祈禱するとは其天性の至情である。圓熟である。サレバ時の古今を問はず、地の東西を論せず、凡そ人間の棲居して居る所には必ずや宗教がある

ブルジョア階級の學者

教授ジエームスは、今米國人の心算の大家

宗教のある所には必ずや祈禱禮拜が行れて居る。歴史家ブルジョアは二千年前「吾人若し世界を旅行すとせんに、城壁なく、文字なく、帝王なく、財産なく、貨幣なく、學校なく、劇場なき市邑を見出す事は是れならんも、殿堂なく若しくは禮拜祈禱なく、又は此等に類したる者なき所とては決して見出得べからず」と斷言して居る。教授ジエームスは二千年後の今日、下の如く論じて居る。「科學的識見の著しく進歩したる今日、祈禱の効力に關し議論する者甚だ多く、一方に祈禱するとの當然なるを論ずる者あれば、他方には之が無用を喋々する者もある。併し彼等のうち、人間は何故に祈禱するかを説明する者が尠い。その理由は他に非ず、是吾人の天性にして禁すべからざるものたる是である。是故に將來科學は如何許り之れに反對する事あらんも、世のあらん限り、人間は祈禱する事を決して止めぬであらふ」と。祈禱は實に人間の

第一章 祈禱の天性

一大事實である。勿論或る時代若くは或る社會が、一時何かの原因又は事情より、宗教に冷淡無情となる事がないではない。(例せば、佛國革命前後の如き、我國御維新後の如き) 又時としては或る個人若くは團體が無神無靈魂を標榜して自ら満足することがないではない。(例せば、佛人ヴォルテールや、我國の中江篤介氏の如き、又幾多の或る不信團體の如き) 併し之を以て人性の常とする事は出来ぬ。此等の何れもは皆な一時的變態であつて、或る原因のために激せられてか、或は或る學說のために動かされてか、爾く極端に流れたのであつて、世と人がその常に復する時は、矢張り宗教がなければならなくなつて來る、祈禱せず居られなくなつて來るのである。サレバ今日の佛蘭西は決して無宗教の國とは云れぬ。我國も今日の所最早や宗教に冷淡無頓着ではない。教授ジエームスの云ふ如く、宗教祈禱は人の天性であるから仕

グオルテ
の大家

ロード、
ヘルベ
ルト、
英國
人、
哲學家、
歴史家

ロード、
バイロン、
英國
詩人、
高名

ハイデ
グ、
米國
近時
の大
學者

方がない。グオルテールの如き人も、アルプスの巔に於て電雷に襲はれた時は、思はず人性の自然に復つて、切に神の助けを祈り求めたと云ふではないか。ロード、ヘルベルトの如き人も、その自著を出版すべき乎、或は思止むべきかにつき、自から決断する事が出来なかつた時、今まで曾て祈つた事のなき神に祈り、其指導を求めたと云ふではない乎。ロード、バイロンの如き人も、晩年に至り、健康日に衰へ、前途の望み心細くなりたる時、朋友某に請ふて、或る老練なる占易者を招待して、自家運命を一轉する秘密を聞かんとした事があつたではない乎。曾て彼の有名なる説教者ムーデー氏が英國に渡りて、其地に信仰の大復興を惹起した事があつたが、當時蘇國エデンポローにエデンポロー不信團なる者があつた。然るにムーデー氏或る時此不信團の會長をして居る學者某に面會する機會を得たので、好機逸すべからずとなして、彼に向

つて信仰の戦争を挑んだ。所が彼は相手にして呉れぬ。我は未來を
信せず、又祈禱を信せずと言張て、勸誘を試むべき餘地がない。そこで
ムーデー氏は其人の側に跪いて、熱心に其人の爲に祈禱したが、其人は
衝立たる儘に、迷信よと云はぬ斗りの様子にて、たいく冷笑して居つ
た。然るに六ヶ月斗りの後、氏がリバプールに在つて傳道して居つた
時、蘇國の友人より受取つたる手紙によれば、此の無神無靈魂を以て自
家の確信として居つた人は、終に悔改めて基督を信する事と成た。而
してその不信團の會員三十人中の十七人までは、彼の例に習つて、基督
信者となつた。宗教の天性は中々強いものである。人好んで自ら之
を滅ぼさうとしても容易に滅し得らるゝ者でない。
斯も宗教と祈禱は人間の天性である。生來の人間が順當に成長して
行ば、彼は必ずや宗教家となるべき筈の者である。必ずや祈禱を勤る

人となるべき筈である。が併ながら、實際を云ふと、人はその生れなが
らの儘に放任して置くと、自から無宗教になり易い。又祈禱などは一
切構はぬ者となり易い。此は一方には罪惡の誘惑があつて、人間の靈
性宗教性を暗まして仕舞ふのと、他方には生活問題が切迫して來て、兎
角目前の事より外には、氣も心も用る事を得せしめぬようになつて來
るからである。故に宗教は人の天性であると言ふて、安心して之を自
然任せにして置いてはならぬ。食慾は天性であるが、併し病人には其
の食慾がない。之と同じことで、罪惡に冒されたる人性は、終に宗教の
天性を失ふに至るのである。此の如き人に向て、吾人は先づ大に傳道
せねばならぬ。吾人は彼等に、人間の萬有にまさりて靈妙高尚なる本
質を有し、且つ永遠に存在するものなる事を知らしめ、又罪惡の恐るべ
きを知らしめ、物慾以上現世生活以上の處に彼等を引きあぐる事を始

終勉めねばならぬ。吾人が傳道に熱心するは必竟之が爲である。宗教心既に然りである、矧んや祈禱の事に至つてはいよく然ざるを得ない。前にも述べたる如く、祈禱は宗教の最要素であるに拘らず、世には自ら宗教家を以て任じて居る人にして、全然之を怠つて居る者が尠くない。彼等の或者は之を無害無益なる迷信事となし、心竊に之を蔑視して居る。そこで祈禱の事實に辨せざるを得ないのである。抑も人を説き勸て彼をして宗教を重んずる人とする事は、實に今日の急務であつて、而かも六ヶ敷事であるが、その宗教を重んずる人をして、眞に祈禱を勤むる所の活宗教家とならしむる事は更に急務でもあり、亦更に面倒でもある。併し此事を忽にする時は、吾人の宗教は空論となり、了る故に吾人は此事を辨するのである。専ら基督教に就て云んに、基督教の主要點は、理屈でない、議論でない、實行であり、生活である。ン

(四) 耶蘇の生活に於ける祈禱

コデ、團體として、個人として、吾人は聖書研究も勉めねばならぬが、吾人の宗教生活の主要部は祈禱である。祈禱は宗教の呼吸である。呼吸が消息すれば、活人は死人となる。祈禱が消息すれば、宗教は空儀式となる。今の基督教は動もすれば祈禱のない基督教になり易い。吾人は此點に於て大に警戒せねばならぬ。

馬可傳第一章三十五節を讀むと「味爽に耶蘇早く起き人なき所にゆき其所にて祈禱せり」と書てある。彼は其弟子等がまだ目を醒さぬうちに早く起き出でて、人なき靜かなる所に往て、祈禱を勤られた。彼は事繁き一日の最初の時間を祈禱に用ゐ給た。斯くて彼は教を宣べ傳んが爲めに附近の鄉村へ往れた。祈禱は實に耶蘇の宗教の生命であり、呼吸で有た。彼は此祈禱によりて身の苦痛を除かれ、心の憂愁を消れた。彼が爲に祈禱は力と慰めの源泉であつた。勵みと望の秘訣

であつた。外目で見てさへ彼の祈禱は常に彼を新にしたのである、活かしたのである。彼の弟子等は始の間は、その譯が解らず、たゞ師は何故に斯く屢々祈禱するであらうと疑惑して居つたが、月日の経つに従つて其意味が少しづつ解つて來ると、師の此有様を目撃して居りし弟子達は、最早や見て斗り居る事が出來ぬ様に爲て來た。彼等自身も亦その祈禱を遣て見たくなつて來た。そこで路加傳の第十一章の始を開けると、「耶蘇某所にて祈禱しけるに、畢りし時、一人の弟子曰けるは、主よヨハ子其弟子に教へし如く、我儕にも祈ることを教へたまへ」と、折入つて願つたと書いてある。此の懇願によりて尊き主の祈禱は授けられ又祈禱に關する大なる約束と奨勵とは與へられた。實に祈禱が自からの大問題となつて來ぬうちは、その人の宗教は確實とは云はれぬ。序ながら思ひ出したから、獨逸にて有名なりし神學者ペンゲルの

逸事の一つを話すこと、しよ。同氏は世にも名高き教育家著述家であつたが、彼は學校の主長として、その事業の複雑なるに加ふるに、著述の事忙はしく、其他に演説や講話やなさねばならぬ事があつて、極めて頻繁複雑なる日々を生涯を送つて居つた。而かも彼は常に健康で、元氣で愉快に、活潑に、その凡ての役務を勤めて居つて倦む様子がない、弱る様子が無い。そこで、ある學生が不審を起して心竊かに思ふた。斯る先生が斯く斗り多忙多端なるにも拘らず、日夜善く務め、善く勵む由縁の秘訣は何であらう乎。是非その秘訣を知りたいものである。斯くて或る夕の事、彼は氏のその居室に居らぬを僥倖として、竊かにその室に忍び入り、窓掛けの後部の處に深く身を隠し、息の音を殺して氏の歸るのを待つて居つた。雖て夜は十時過ぎ十一時ともならん頃、先生は外から歸つて來て、その席に着くや、聖書を開いて一時間斗り精讀し

つゝあつたが、それが済むと、彼は跪いて祈禱を始めた。而してその祈禱は極めて眞摯熱心なる者であつた。斯く彼は凡ての利害を神の御手に委ねて、身を榻上に横へるや、最と安らかに睡り入た。最前より窓掛けの後から彼を瞥見しつゝ、ありし學生は、茲に始めて先生が善く屬み、善く勤るを得る由縁の秘訣を悟つたのである。靈と眞を以てするの祈禱こそ、人を新にし、活かし、強め、高うする源泉である事を悟つたのである。

汝知らざるか、聞ざるか、エホバは永遠の神、地の端の創造者にして倦たまふことなく又疲れたまふことなく、その聰明こそ測りがたし。疲れたる者には力を與へ、勢力なき者には強きをまし加へ給ふ。年少き者も疲て倦み、壯なる者も衰へ衰ふ、然らばあれどエホバを俟望む者は、新なる力をえん、また望の如く眞を獲りてのほらん、走れども疲れず、歩めども倦ざるべし。以賽亞四十の二八一—三一

(五) 祈禱は
靈界に於ける
一大勢力

電気は自然力のうち最も不思議なるものであつて、之が存在及び効用の知られたのは、つひ昨今の事と云ふても宜い。由來山川として流るる水は、水として知られ、水としてその効用を致したるものであつたが、近頃に至りて、その中に電気と云ふ不思議な勢力が籠つて居る事が分つて來、又その電気を引出す方法も知れて來たので、今や水力電気なる者が諸種の用途に供給せられて、或は市街を照らす電燈となり、或は交通機關を動かす動力と成て居る。電気及びその効用を知つて居る社會から、之を知つて居らぬ社會を見たら、實に氣の毒な者である。彼等は人生を幸福にする由縁のものが、其居住せる村や町の邊を流る、川の中に蓄へられて居る事を知らぬのである。云は、彼等は、大なる富源の程近き所に藏れてあるを知らずして、身の貧困を悲み、啣つ者である。實に蒸氣力や電氣力が、自然界の一天性であるが如く、宗教と祈

大監督
ンソ

騰は心霊界に於る天性である。故に人間にして宗教を信せず、祈禱の
 實力を知らぬ人は、電氣とその効用を知らぬ人に比すべきである。彼
 は、人の精神を清め、高め、強めて、その人格を造り出す耳ならず、人の生活
 を安全にし、又幸福にし、有益ならしむべき偉大なる力、不思議なる力の
 湧き出る源泉に心附かずして、精神的に最も貧弱にして而かも極めて
 不幸不満足なる生活を送りつゝある者と云ふべきである。カンター
 ベリーの大監督ベンソンは、近代の英國が生み出したる偉人の一であ
 るが、此人に就てその地位の相續者たるドクトルランブルの曰た言は
 下の如くである。「彼につき余が認識し得たりと信ずる一事は、彼に於
 ける成長力の偉大なる事にして、此點に於て彼は多くの人に過たり。
 その智的勢力に於て、その洞察力に於て、その人を支配する技倆に於て、
 その困難なる事件を處理する技倆に於て、彼は死する日に至るまで其

成長を持続けつゝありき」と。此の如き驚くべき心靈的擴張の秘訣は
 那所にありしや、吾人は之を彼が傳記中に遺されし一事に歸せざるを
 得ない。曰く「彼は與られし光明に服従するに忠信なりき、彼は神が彼
 を司り、又導き給はんとを祈りたりしが、其應驗は與へられたり」と。
 眞實なる祈禱こそ、實に貴むべき者である。祈禱の實力を悟り得たる
 者こそ、最も大なる財源を探り得たる者である。祈禱は消極的には、吾
 人を凡ての疑惑恐怖より救ひ出す効力を有する者であるが、積極的に
 は、吾人をして新しき生命と能力とを得せしむるものである。

我れエホバを尋ねたれば、エホバ我に答へ、我を諸の畏懼より助け出し給へり。彼
 僕エホバを仰ぎのぞみて光を蒙れり、彼等の面は恥あからむことなし。
 詩篇三五の四、五

第二章 祈禱の事實

第二章 祈禱の事實

吾人は前章に於て、祈禱は人間の天性に發する者であることを論じたが、祈禱が既に人間の天性に基くものであるからには、その人間の住んで居る所には、必ずや祈禱の事實の存在すべきは當然と云はねばならぬ。然り、祈禱は實に人間に關する事實の最大なるもの、一である。そこで、吾人は、此の大事實を左の三段に分けて論せんと欲するのである。第一、祈禱することの天下一般に行れて居る事。第二、祈禱が人の道徳及び事業の上に良き影響を與て居る事。第三、祈禱に加られたる應驗の確實である事。以下此順序に従つて論ずることとするが、凡て此等は祈禱の事實てう總稱の中に含まるゝものである。

第一 祈禱することの天下一般に行はれて居る事

實際に祈禱することは、人間の天性に發する者であるから、その天性を滅ぼさぬ間はせうしても之を禁遏することは出来ぬ。此は生れ出た計りの小供が誰にも教へられず、母の乳房を求むると同じことである。されば此は固より外界の事變のみによりてのみ引き起さるゝものではない。人間の本質内性より發し來るものである。「あゝ神よ爾は我神なり、我れ切に爾を尋ね求む、水なき燥き衰へたる地にある如く、我靈魂は燥きて爾をのぞみ、我肉體は爾を戀慕ふ」とは、人間と云ふ凡ての人間の性情を言表はしたものであつて、此の性情こそ、人間世界に祈禱の大事實を成立せしむる根本である。

勿論斯る天性あるにも拘らず、人はその成長と共に目前の利害に蔽はれ、卑近の事物に遮ぎられて、その心靈近視眼的となり、宗教を忘れ、神を忘れ、終にその一生只目前の事のみにも身も心も占領せらるゝ場合があ

るが、斯る人々のためには、時として、その一身一家に於て生ずる事變が偶々その宗教心を覺醒し、祈禱をさへ爲すに至らしむることがあるのである。その事變のために今まで宗教には全く無頓着であつた人が、遽かに熱心に祈禱を勤むる様になつた例は数々ない。「祈禱せんことを學ばんと欲する者は海に行け」と云へるジョージ・ヘルベルトの言は、此事を云ふたもので、海上計りでない、陸上でも、家の内でも、人は身に餘れる困難なる事情ある時、自ら信神心を引き起さるゝ者である。疫病の流行する時、戦亂の打續く時、恐慌の繰返さるゝ時、その一家一身に特別なる困厄の生ずる時、人は自らその信神心を呼び起さるゝ者である。或人は信神事を以て、只此等の外部の事變によりてのみ惹起さるゝ者とするが、それだけでは兎ても事の全體を説明することは出来ぬ。由來天下人心には宗教心があるからこそ、一時外部の事物や、目前の利害の

ために蔽塞されて居るとしても、その意外の事變に際會するに及んで、深く内に藏れて居つたものが、現はれ來るのである。艱難辛苦が人を宗教家にするのではない。天性の宗教心が、艱難辛苦の爲に、人心の底から引き出されて來るのである。ドクトルイリシヤウオースは云ふた、「吾人如何程遠く過去の記録に尋ね入るも、祈禱することは、人の特色たるを見出し得べし。有史以前の人々は或る符號を用ゐて祈禱をなせるが、有史以來、人間は常に祈禱したり。吾人エヂプトの古文書を翻く時も、その中に多くの祈禱文を見出すべく、吾人バビロニヤの古石碑を檢する時も、迷信事の中に混せられたる祈禱を見るべく、吾人印度の古書を翻譯するも、或はベルシヤ又は支那の古書を翻譯するも、その中に祈禱文の甚だ多く記されたるを見るべし」と。宗教及び祈禱の事實は、決して古き時代に存する計りでない。現在、上に國をなし、社會

をなせる凡の人民は、最下等の野蠻人より、最高等の文明人に至るまで、皆な或る宗教を有し、或る祈禱を爲て居る。一時的事情よりして、或る人民又は或個人が無宗教無信神となる事あるも、それは除外例と云ふべきである。夏季中寒き日があればとて、夏季は暑い性質を失はない。冬期中、暖い日和があればとて、冬季は寒い性質を失はない。天下萬民は神を信せざるを得ない。祈禱をなさざるを得ない。「祈禱を聴き給ふ者よ、諸人こそどりて爾に來らんとは、天下人心の大勢を適切に言表はしたるものと云ふべきではない歟。勿論世の中に眞神を知らぬ人民は多い。人の手にて造れる神や佛を拜んで居る者は多い。併し偶々賈札の流行して居る事が、眞札の融通して居る事實を反證する如く、多くの神ならぬものを、人々の拜み敬ふて居ることは、終に眞正の宗教に至りて、彼等の天性の希望が成就せらるべきを豫表する者と云はねばな

らぬ。眞の神は如何なるものなる乎。此神に事ふる道は如何にあるべき乎。此等の進みたる問題は、勿論、宗教的に教育せられたる人でなくては容易に解釋する事は出来ぬが、假令此等の事がよく解つて居らぬ人々でも、その自らが神として信する所のものを尊敬し、又之に祈禱を捧ぐる事は知つて居る。祈禱する事は人間の自然であつて、此は又古今東西に亘つて曾て衰退したことのなき宇内の大事實である。

第二 祈禱が人の道德及び事業の上に與へたる影響

善人が祈禱するのである歟、祈禱が人を善人にするのである歟。鬼も角も善人と祈禱とは切ても切ることの出来ぬ因縁がある。此は基督教と異教との區別によらぬ。何れの社會又は國地に在りても、祈禱する者は、祈禱せざるものよりは、比較的、その道德が高い。勿論、その説明は格別面倒ではない。極めて普通の事例で、その理を説明すること

が出来来る。試みに見よ、人は其の交はる所の朋友に因て、其人格に大なる影響を受くるではない乎。その執る所の職業に因て、其徳に大なる影響を受くるではない乎。されば人々の日夜信仰し祈念する所のもの、神であれ佛であれ、善き感化を其人々の心上の及ぼすべきは當然の事と云ねばならぬ。神は上である。人間より強く賢く正しくして、又慈みあり憫みあるものと信じて、之を敬ひ、之に事ふるとは、自づとその人々の向上心を養ひ、その徳性を開發するの効果あるべきは疑ふべからざる事柄である。或は英雄崇拜と云ひ、或は天體崇拜と云ひ、鬼角何等かの理想が、その神とし、その佛とする所のものに含有せられて居る場合には、その信神その祈禱が、多少善良なる影響を、その人々の品性及び道德に及すべきは當然である。勿論世には人類の風俗及び道德を下落せしむる底の宗教及び信神事がないではない。彼の流行神

の如き、亦た淫祠と稱へらるゝ者の如き、彼等は彼等を信するものをして益々その惡徳を募らしむるものであるが、此の如きは余が例外とする所であつて、此の如きは正當に宗教とは云ひ難く、又随つて彼等の祈禱も祈禱とは云はれぬ。狐や狸に向つて、福田利益を熱求するが如きは、人間らしき人間のすべき事でない。そのなす所は狂氣じみた事であつて、眞面目に之を宗教とも信神とも云ふ事は出来ぬ。神は上である。人は自分以上の智慧、力能、徳性を理想し、聯想して誠意誠心もて之に事ふるものでなくてはならぬ。斯くの如く、吾人は茲にその祈禱の道徳に及ぼす影響を云爾すと雖も、此等を以て、一々悉く神明の應驗とする者でない。眞の活神ならぬものを相手として居る場合にありては、その相手が活きて居る者でないから、實際に應驗を與ふべき筈はない。たゞ祈る人の心掛けが善い所から、又その自然なる向上心を活動

せしむる所から、其修養の効果として、その徳に於て大に得る所があるのである。例すれば常に遠方を注視する者の眼は、自らの修養によりて終に視力を強めらるゝが如く、常に手腕を活動せしむる者の手腕は、自らの活動によりて終にその發達を完ふするが如く、常に十分なる呼吸をつとむる者の肺は、その自らの呼吸によりてその健康を完ふするが如く、神信心によりて、常にその向上心を修養するものは、その自らの修練の功によりて、自ら之が主觀的利益に與り、其徳性を進善する効果を收るのである。凡て此等の利益は祈禱に對する反應的役得で、信心ある者に與らるゝ攝理の賜物と云ふてもよい。併しながら人格なき理想を仰ぐことですら、尙は既に多少の利益ありとすれば、活ける眞の神、凡ての徳に於て完全無缺なる天父を仰ぎ、之を信じ、之に事へ之に求むることより結果すべき利益は、茲に説明せずとも極めて明白であ

る。基督信者が禮拜を最も大切とするは之が爲めである。世人は神でなき者を神として拜するによりてさへ多少その道と徳に於て利益せらるゝ所ありとすれば、まして吾人眞の活ける神に奉事祈禱せん者の受くべき感化應驗の極めて大なるものなるべきことは、之を想像することゝが決して六か敷ない。

以上は、重に、祈禱の人の品性及び道徳に及ぼす所の利益につき世にありふれたる事實を指示したるものであるが、吾人は更に一步を進て祈禱と人の事業との關係を考へて見る事としよう。之を要するに、古來大事業に當れる者は、信神深い者であつた。勿論吾人と雖も悉く然りとは云ぬのである。世に大事業を成遂げたる人々にして、所謂無神無靈魂主義で遺通した人も少くない。明治の時代となりて、福澤先生の様な人もある。加藤弘之博士の如き人もある。が、併し、概して云へば

二宮尊徳

兒玉總參謀長

である。我國の事にして、古來大事業をなしたる人々は、概して、信神深い人であつた。曾て彼の有名なる二宮金次郎氏が、野州中村の廢地再興の事を、その藩主より依頼されて、無據之に着手した事があつたが、その事業中程に至りて、非常に困難となつて來た時、氏は何れへかその姿を隠して仕舞つた。そこで人々は、大に驚き且つ怪んで、諸方を探して居つたが、或人が下總の成田から歸つて來て、氏が不動堂に御籠りをして居るのを見たので告たので始めて安心したと云ふ話がある。如何なる英雄豪傑でも、大難事に際會する時は、自分獨りでは遣れぬの念が起て來るものである。そこで神の助を仰ぐ精神が出る。日露戰爭中奉天大合戦の前夜、兒玉總參謀長が、獨り陣營を抜け出で、人なき原嶺に立ち、東方に向つて頻りに祈念して居たと云ふ話がある。實際の事か、それともたゞの風説か、何れかを知らぬが、當時の事情を思へば、實に

左もあらんと信せらるゝ。又實際此事があつたからとて、兒玉大將の英雄たるの價値は少しも減らぬ。否な却てその至誠の程が現はれて一しは頼母しく思はるゝのである。そもく我以外に於て善に與みし義に黨する者のある事を信せざる者は、到底單身起て以て大事に當るの決心を打立つる事は出来ぬ。我國の維新大革命を仕遂げたる人は、多くは信神深い人であつた。彼等は藩政府にも頼らない、幕府にも頼らない、たゞ皇天皇上に頼る所があつて、起つて大事に當つたのである。若し御維新前に於ける義人志士が、御維新後の博士學者の如くに、多く無神無靈魂説を唱ふる者であつたらせうであらふ。果して渺乎たる彼等が自ら進んでよく我維新の大事業を遣り遂げたであらう乎。義に與し善に黨する神を信する時は、我の決心丈けにした所が、勇猛なるものとなつて來るのである。又遠大なる計營の中に、社會人事

ガスタバ
ス、アド
ルフ、ス
信神深き

を統制する神がある事を信する時は、我の事業は直にその志の如くならざるも、終には何れの日にかその事の成就せらるべきを疑はない。余は今斯る人々の祈禱に向つて、眞神が直ちに應驗を與へ給ふと云ふことを云はぬ。それは別問題として置いた所で、斯く信じ斯く決心して、事業に當る者は、他の無神無靈魂主義者に比較して、自から其事業をやりに通す資格がまさつて居るべきは明白である。まして矧んや、其人の信する所が、活ける眞の神にてあらん乎。其祈禱に因て得る所の力は、實に偉大なる者であるべき筈である。彼マーテン、ルーサが宗教改革の大危機に際し、見るもの聞くもの悉く反對迫害失敗冷却を示さるは、なき眞最中に在りて、獨り密室に入りて熱騰し、程經て「我等勝てり我等勝てり」と叫びつゝ、出來りたるが如き、ガスタバ、ス、アドルフ、スが遠く出征してウエルヘンに露營せる時、獨り孤室に籠りて、身に餘る大

責任を深く感じつゝ、只管に神に祈りて新なる奨勵を受けたりしが如き、蓋しその祈禱こそは、彼等のために百萬の援軍にもまさる所の勇氣と奨勵とを携へ來れるものであつた。此意味に於て祈禱と事業とは通常大關係を有して居る。

第三 祈禱に加へられたる應驗の確實である事

今まで論じた所ろだけでは、吾人の祈禱に慥かなる應驗のある事は明言せられて居らぬが、實際に就て段々と取調べて見ると、結局祈禱の應驗は確實なる事實であつて、毫も疑ふことは出来なくなつて來る。勿論今まで述べた所だけでも、祈禱の効果は、たゞ主觀的感化のみとしては説明し難き事が暗示せられてある。その相手としては何等客觀的實在者あらざるに、只我主觀的心的狀態が神を理想して、之にその至誠を注ぐ所から、自から主觀的效果が我徳性及び事業の上に生ずると云

ふた丈けでは、實際の事實は充分に説明せられて居らぬ。若しその効果と云ふものが、單に心靈的事物のみに限られて居る場合に於ては、或は爾く説明して、それで満足する事が出来るかも知れぬが、祈禱の効果は決して單に心靈的感化にのみ限られて居らぬ。精神と祈禱によりて人の得る所のものは、特に精神的慰安とか、心靈的悟達とか云ふもの計りではない。勿論此等のものはその効果の最も大切なる者に相違ないが、物質的に形態的に觀察した所で、どうしてもその効果に相違ない判定せざるを得ざるものが澤山にある。基督は曾て「神は靈なれば拜する者も靈と眞をもて之を拜すべき也」と教へられたが、併し彼は物質的形體的事物は決して祈禱の主意とはなすべき者でないとは教へて居らぬ。現に主の祈禱文中に於て、彼は「我々の日用の糧を毎日に與へ給へ」と教へたではない乎。而して又彼が己に來る人々に向つて

與へ遣らんと約束せられたる賜物は、主として人の心靈精神に關係するものであつて、彼は現に凡て勞れたる者また重を負る者は我に來れ我汝曹を息ませんと云つて居るが併しながら彼は人の肉體の缺乏や、疾病を決して見過し給はなんだ。輒ち彼は或時は五つのパンと二つの肴を以て、餓たる五千餘人を飽しめた事もあるし、亦種々の病患によりてなやみ苦しみて居る者を愈して遣つたこともある。そこで基督の語と實例とによりて教へられたる吾人基督信者の祈禱題目は、人間萬事に關係すべきことが明白となつて來る。人の救はるゝ爲めに祈るは、只その無形の心靈のため計りではない、その人の肉體のためにも祈るのである。心の苦める者のために祈るは、只彼が心に靈的慰安を與へらるゝ事のみを祈るのでない、その物質的必用物の豊かに與へられんことのためにも祈るのである。我が家族の中に病めるものゝある

時、たゞその靈魂の安全ならんためにのみ祈るのでない、亦その病氣の癒されんが爲めにも祈るのである。國家に艱難の事あるに當り、たゞ國民心靈上の利害のためのみに祈るのでなく、その物質的缺乏の盈たされんが爲めにも祈るのである。天災地異の除かれんが爲めにも祈る。時として、はよき天氣を與へられんためにも、豊かなる雨を與へられんが爲めにも祈る。疫病の消滅せんが爲めにも祈る。戦争の休まんが爲めにも祈る。吾人が斯論するを聞きて、或はその心中、それでは基督教も迷信者流ど其状態を同うして居るではないかと想ふ人もあらふ。併し讀者、もしよく辛抱して本書の全部を讀み給はゞ、その迷信でなき次第が段々と明白になつて來るであらふ。斯く吾人は基督により人間萬事の爲に祈禱する事を教へられた者であるが、眼を轉じて實際に於ける祈禱の效果如何を取調べて見ると、其應驗の人事百般の上に於て

歴々として認めざるを得ない的確なる證據がある。論より證據で吾人は次章に於て祈禱の効果を證明するに足る事實談數ヶ條を示さうとして居る。兎角宗教道德の如き高尚なる事物の研究は、抽象的の議論だけでは、充分にその眞理を證明する事が出来ぬ。間々具體的事實をかり來りて之を證定せねばならぬ必要がある。勿論時としては續釋法式によりて論定せねばならぬ場合もあるが、歸納法式によりて證明するかた遙かに満足なる結果を生ずることが多い。吾人が次の長い一章を事實談に用ゆるのは、之が爲めである。因て序ながら茲に一言斷はつて置く。

吾人は上記に於て祈禱の事實を三段に分て論じた。概ち第一人類は一般に祈禱する者である事。第二祈禱は人の道德及び事業の上に少なからぬ影響を與ふる者である事。第三祈禱の客觀的應驗は疑ふべ

からざる事實である事。此三事は一ト纏めにすれば、吾人の所謂祈禱の事實のうち悉く含有せられて居る。吾人は本章と次章に於て論ずる所談る所により、此事實の確實なる事を證明することが出来たと信じて居る。そこで序ながら、此所に云つて置かねばならぬ大切な事柄が出て来る。そは此の祈禱の事實が證定する所の他の大事實である、左にその要點丈けを示すこととする。

甲 宇宙組織に心靈的側面ある事 吾人の關する所のものは眼に見ゆる物質的世界のみではない、其内に、外に、下に、上に、更に高妙なる心靈的世界がある。此心靈界は物質界と入組んで居つて、而かも互に相影響して居るが、二者全く別物として存在して居るのである。而して吾人人間は自らも亦物質及び心靈の二者より成立つ者で、自ら是亦一ケの小天地である耳ならず、亦外部にある心靈物質の二大世界と

密切なる關係を有して居る者である。されば我が精神や意志の働く領分も、たゞ物質界のみでない、亦心靈界に對つても働くのである。斯くて我精神や意志の活動が、物質界に或る影響を起し、或る目的を達するが如くに、同じく我精神意志の活動が、心靈界に或る影響を起し、或る目的を達するのである。而して此心靈界の事實は、吾人人間に取りては、物質界の事實よりは更にまさりて貴重なのである。是故に使徒パウロは「我儕が顧る所は見る所の者にあらず、見ざる所の者なり、そは見る所の者は暫時にして見ざる所の者は永遠ければ也」と云ふた。吾人が永遠不滅なる心靈界に關連して居ると云ふとは實に愉快なる事ではない乎。吾人は自己が物質丈けでないが如くに、外界も只物質のみではない。吾人のうちに靈妙なる心靈があるように、吾人の外界にも心靈的一大組織がある。此の心靈的生命は肉體が死ねばそれと共に

終焉になつて仕舞ふ者ではない、その肉體の壞るゝと共に消ゆるものではない。故にパウロは又云ふた「我儕之を知る、我儕が地にある幕屋もし壞らば、神の賜ふ所の屋天にあり、手にて造らざる窮なく有つ所の屋なり。……是故に我儕の心常に剛毅もつとも欲ふ所は身を離れて主と偕に居んことなり。是故に我儕身に居ても身を離れても彼の心に適はんことを勉む」と。

乙 有意識的活神の存在し給ふ事 果して祈禱に應驗があるに違ひないとすれば(本章及び次章に於て論證する如く)吾人は客觀的に吾人の祈禱を開きて、之に應答する者の必ずや存在し給ふべきを信せざるを得ない。たゞ心靈的一大組織が吾人の外部に存在して居つて、吾人の心靈に應答すと云ふ丈では足らぬ。どうしてもその心靈的一大組織の中に中心がなければならぬ。恰かも何れの電信組織に於て

も之に中心點があつて、四方よりの通信を司るが如くでなければならぬ。そも、祈禱することば、人間がその意志希望を、この心靈界の中心に對つて發表するに外ならぬので、その應驗なるものは、此の中心なる活ける靈神が、その聖意に於て善とし給ふ時、或は心靈的事物を以て、或は物質的事物を以て、實際之に應答し給ふ事を云ふのである。活ける眞神、愛と慈みに富める天父、智慧と能力とを以て萬力を治めし給ふ主宰者、の存在し給ふとを確信する時は、世に祈禱程正當なるものはない。祈禱程大切なものはない。祈禱程愉快なものはない。祈禱程立派なものはない。また祈禱程有益なものはない。故に使徒ヨハネは云ふた「凡て、我儕神の旨に合へる事を求めば、彼必ず聽ん、是れ、我儕彼に向て篤く信する所なり。凡て我が求める所を彼の聽くことを知らば、我が求むる所を彼に得ること亦知る也」と。

第一五の
四

去れば正當に祈禱するとを人間に教ゆる宗教は、吾人に取ては最も難有い宗教と云はねばならぬ。試みに思ひ見よ。空氣の存在と効用とを人間に教へたる者は、人間の恩人と云ふべきではない歟。蒸氣力を發見して之が利用の道を人間に授けた者は、人生を幸福ならしめたる者ではない歟。電氣力を見付出して之を人間生活の百事に應用する事を得しめた者は、吾人の讚美感謝を受くべき者ではない歟。それ既に此等の勢力の存在することと、之が効用とを吾人に教へたるものが、人類の恩人であるとするれば、吾人に心靈界の實在を示し、その組織の確實を證し、祈禱の有効を教へ、且つ自ら之を實行して吾人を奨勵したる者の大恩は、決して輕視すべきでない。勿論(一)心靈的世界の存在(二)其中心點たる活眞神の存在(三)祈禱の有益有効なることを人間に傳へたものは、只耶穌基督のみとは云れぬが、併し基督世に現はるゝ迄は、此

等の事は半信半疑の中にあつたので、云は、未定問題であつた。所が
 基督來りて教を説に及んで、此等の事は凡て明白確實となつて來た。
 故に使徒ヨハナは曰ふた「未だ神を見し人あらず、惟生み給へる獨子す
 なはち父の懷に在る者のみ之を彰せり」と。斯く眞の神は基督により
 て始めて人類に明示せられたのである。心靈的組織の存在も同様で
 ある。「神の國は顯れて來る者にあらず、此に觀よ彼に觀よと人の言ふ
 べきものにもあらず、夫れ神の國は汝曹の衷に在り」とは、基督の教であ
 つて、彼は其他種々様々の事柄によりて、心靈的の神の國の實在及び眞理
 を説明せられた。正に預言者の云ふた様に「彼は譬を設けて口を啓き、
 世の始より隠れたる事を言出たる者である。斯く彼は心靈的大組織
 ある事と、その組織の中心點たる活る眞神ある事とを吾人に明示せら
 れた丈けでなく、更に進んで此神、此心靈界に、吾人の關連する由縁と、そ

の關係によりて來らすとを得べき利益と効果とを保證せられた。彼
 は吾人を教へ諭して宣ふ「爾曹の拜する者を爾曹知らず、我儕の拜す
 る者を我儕は知。……眞の拜する者、眞を以て父を拜する時來ら
 ん、今その時になれり、夫れ父は是の如く拜する者を要め給ふ、神は眞な
 れば拜するものもまた眞と眞をもて之れを拜すべきなり」と。「眞と眞
 を以て拜すること、是れ有効なる祈禱の本質である。此本質を有して
 居る祈禱は必ず目的を達する。則ち神は必ず之に應驗を與へ給ふの
 である。故に彼は亦宣ふた「求めよ然らば與られ、尋ねよ然らば遇ひ、門
 を叩けよ然らば開かるゝとを得ん」と。譬へば彼は心靈界の大發見者大
 技師の如し。彼は管に其心靈界組織の實在及び其中心者を明示せし
 耳ならず、吾人をして自ら此心靈界に關連して、その偉大なる勢力と生
 命を抽出採取して、以て日常百般の事物に之が効用を普ねからしむる

のである。録して神の己を愛する者の爲に備へ給ひし者は、目未だ見
ず、耳未だ聞かず、人の心未だ念はざる者なりとあるは、此一點に於て實
に適切と云はねばならぬ。

第三章 祈禱の應驗

第三章 祈禱の應驗

祈禱は果して吾人に取りて有益有効なるものである乎。その主觀的効果は事實であるが如くに、その客觀的効果も亦事實である乎。吾人は理論上この兩面に於ける祈禱の効力を信するものである。故に吾人は次章に於て、理論上より祈禱有効の原理を説明せんと企て、居るが併しその理論に入り込む前、前章に豫約して置た通り、茲に祈禱應驗の實例を舉示する事が讀者の爲めに頗る有益であらうと信する。兎角如何なる眞理も、理論丈で人を満足させる事は出来ぬものである。そこでその眞理を證明するに足るほどの實例を示す、是が一般の法式である。譬へば引力にしても、電氣力にしても、進化法にしても、又は遺傳法にしても、理論丈けでは、中々人を満足させる事が出来ぬ場合が多

い。此時に當り、巧みに採用せられたる幾何の實例は、不思議によくとその眞理を證明し得るの効能を有する。眞理の辯證上、續釋法よりも歸納法の必用なるとは之が爲である。そこで吾人は本章に於て祈禱の應驗につき、吾人が聞知し得たる事實のうち、最も著明的確と思はるゝ實例數ヶ條を擧示することゝする。吾人は讀者が之によりて直ちに祈禱有効の眞理を承認するに至らずとするも、彼等が次章に於けるその道理を理解するための準備とならうと信ずる。次章に於ける吾人の研究も、たゞ之を議論とし、理屈とした丈けでは、勿論不完全なるものに相違ないが、併し讀者にして心氣公平に、先づ本章に擧示せらるゝ所の事實談を味はひ、果して世に斯る事實あらん歎、あらば、その理由は如何なりやと、只管その事實の説明を得んとする心情を以て、次章の理論を味はれなば、恐らくは事實と理論の兩面を別々にして見るものには

解らぬ所までが解るやうになるであらうと信ずる。序でながら、祈禱應驗事實に關する記録、世にその類多きうち、米國ハワード大學校々長たりしウヰリヤム、ダブリウ、バトン博士は、よき材料を採集したものはない。因つて吾人は同氏著の「祈禱及び其著明なる應驗」と題せる一書より、特に適切と思はるゝもの數例を譯出して、讀者の一榮に供することゝした。右バトン博士の著書は、二十版以上を重ね、一時は非常に喧傳せられたものであつて、祈禱に關する理論數章の外に、應驗實例數百を部類分けにして擧示して居る。讀者若し此事に關し一層の研究を望まば、一書を購ふて精讀せらるゝことを望む。

第一 ヘンリー、ヤング、ステリングが祈禱によりて

學業を仕遂げたる事

此人は、獨逸なるバーデン大公爵家の侍醫たりし人にて、眼科の名家で

あつた。彼は亦有名なる文學者ゴエテと時代と國地を同ふし、而かも互に親密の間柄であつて、ゴエテ其人は純粹のクリスチャンとは云へぬが、ストラリングが堅き信仰と祈禱の精神とを以て一生を送り、而かも彼には祈禱應驗に關する不思議なる實驗あるより、ゴエテは彼を強ひてその自叙傳を著はさしめんと勸告した事があつた。

此人青年にして志を起し、何卒して何れかの大學に入りて醫學を修め醫師たらん事を欲し、日夜頻りに之が爲めに祈禱したるが程もなく、ストラスブルヒの大學に入りて學ぶことが、神の聖旨であるとの確信を與へられた。而して之が學資として要せられる金額の凡そ一千弗なるに對し、彼は自分の力にてその十分の一を工面する事さへ六ヶ敷ことを知らないではないが、彼は天父がその必要を盈たしめ給ふべきを毫も疑はなかつた。そこで彼は只僅に四十六弗の金を懐にして、その

郷里を辭し去つたが、數日の旅行をなして後、目的地まで尙ほ三日路を隔てたるフランクフォルトの旅館を立出でたる時、懷中に遺れるは只一弗のみであつた。併し彼は神に其事を告げ、只管その助けを祈れる外、何人にも其事を語らず、祈禱しつゝ、その道を進み行いた。然るに間もなく、自己と同郷の一商人某氏に確と行き遭ふた。ソコで某氏は彼より、遊學の爲め、ストラスブルヒに行く次第を聞き、彼にその學資の出所を尋ねた所が、そは富める天父より來る筈だとの單純なる返事を受けた。某氏は更に進んで現在懷中せる金子は如何と問るに、彼は只一弗と答へた。某氏は彼の單純なる信仰に動されざるを得なんだ。そこで彼は善し余も御身の天父の召使の一人である」と云つて、三十三弗を彼に渡して立去つた。斯くして彼は三日路を経て、漸くストラスブルヒに到着はしたが、時に身に着たる金子とては亦一弗に過ぎぬ。ソ

コデ彼再び熱心に祈禱したるに、意外にも初見の同室者より三十弗を
 與られた。其様此様するうちに、聴講料を拂はねばならぬ木曜日が到
 着したが、彼は最早之に充べきものを以て居ない。而して若此日の暮
 れぬうちに、之を支拂はねば、彼の名は學生簿より削去らるゝことを免
 る事が出来ぬ。そこで彼は此日を全く祈禱に費したが、午後の五時と
 なりしも、何事もない。茲に到つて彼はいよゝ一生命となり汗を
 出し、涙を流して、祈求めた。すると、その室の戸を叩く者がある。開て
 見ると某氏であつた。某氏は彼が斯くも室内に籠居せるを不審とし、
 且學資の有無を尋ねたるに、「一銭もない」どの返事であつた。彼は「嗚呼
 解し得たり、神は御身を助けん爲めに余を茲に遣し給ひぬ」と云て立去
 たが、間もなく四十弗を携へ來りて、彼に與へた。其恩人の去つた後ら
 彼は地上に身を投げて涙ながらに感謝した。其後數年間大學在學中

ホーランド
 ユニバーサル
 國名
 神學者

の彼の實驗は、異ほ同一であつた。彼は屢々窮乏の極に行きつまつた
 ことがあるが、神はその時毎に彼の祈禱に答へて、彼になくてならぬ
 のを與へ給ふた。彼の時代は懷疑の時代であつて、彼の周圍には懷疑
 論者が多くあつた。而して彼は常に彼等の議論に答辯することが出
 來た譯ではなかつたが、而かも彼は祈禱の力を確信して、疑はず、主イエ
 スキリストに對しては常に忠信なる者であつた。

第二 切迫したる場合に祈りて助けを得たる醫者の事

此話は有名なるホーレスブシユテルが、その著「自然及び超自然」中に掲
 げたる一例であつて、此は彼がカリフォルニア巡遊中本人より聞取り
 たる實驗談である。その實驗談の主人公たる醫師某は、其妻と共に、一
 年以前より拓け始めたるカリフォルニアの一商業地へ轉移し、或る町
 に、一月十弗の約束で、小さき一軒の家を借り受け、漸く開業はしたが、程

なく家賃支拂の前日となつた。然るに之に宛つべきものとしては一錢もなく、又他より受取るべき心當りもない。そこで彼は其妻とも談り、最早祈禱より外に避難の方法なきを知りて、互に相勵まして熱心に祈禱したが、その必用物は必ず盈さるべしとの保證を與へられて祈禱を終つた。因て此の上の心配は不必要として、兩人共安心しては居つたが、いよ／＼翌日となるや、家主は例になく、朝早く我家に入り來つた。之に驚かされたる夫婦の心は、言ひ合せたる如く失望に沈みかけた。祈禱の有効を疑ひ始めた。然るに彼が入り來りて家賃の請求をなす前に、一隣人が何か彼に所用ありとて、少時彼を戶外に呼び出した所へ入りちがつて尋ね來れる未見の一人があつて、ドクトルよ、余は曾て熱病を患へたる時、御身にかゝりて十弗の謝禮をなすべかりしに、その事を怠り居たりとて、十弗を投げ出して何れへか立去つた。彼は如何に

考ふるも、その人その事を思ひ出すことが出來なんだが、あつた事に相違なしとて、感謝して其金を受取り、纏て入代つて來れる家主の手へ、督促の矢を射かけられぬうちに渡してやつた。

第三 ルーテル祈つてメラクソンを起しめたる事

宗教改革の一明星フヒリツプ、メラクソン、或時回復の望どては露ほせもなき大患に罹り、氣息奄々として床上に打臥して居つた。所がその親友にして同勞者たるフヒリツプ危篤との報に接して入り來つたるマーテン、ルーテルは、先づ彼が衰へ果たる有様を一見して堪え切れず、傍目も憚らずに流涕號哭した。この物音に不圖眼を開きたるメラクソンは、嘔いた。「ア、御身はルーテルよな、御身は何故我をして平和に去らしめぬ乎」と。ルーテルの返事は「フヒリツプよ、我等はまだ御身を解任する事が出來ぬ」であつた。斯くて彼は跪きて一時間餘り其

回復の爲めに渾身の熱心を絞つて祈禱したが終にその祈禱の天父に
 聽許せられたことを感ずるに至つた。斯くて再びメラクソンの枕
 邊に進み寄りしに、彼はルーテルの手を把つて、又囁いた。「親愛なるル
 ーテルよ、御身は何故に我をして平和に去らしめぬ乎」と。彼は答て「否
 否」フヒリップ、我等はまだ働き場より御身を解任することが出来ぬと
 云ひつゝ、行きて一椀のスープを携へ來りて、その口許につきつけたが、
 メラクソンは之を辭して、又々云ふた。「親愛のルーテル、御身は何故
 に我をその家に歸さぬ乎」と。茲に到りて大改革者は稍や興奮し始め
 た。斯くて斷乎として彼は申渡した。「フヒリップ、我等はまだ御身を解
 任することが出来ぬ、フヒリップ、此スープを飲み、飲まぬとあらば、余は御
 身を破門すべし」と。茲に到てフヒリップは、聖愛に強迫せられて、餘儀
 なくスープを飲乾た。病人の様子は遂に變つて來た。此有様を見て

取つたるルーテルは、欣然として我家に歸り、その最愛の妻に語つて曰
 つた。「神は我が祈禱に答へて、我兄弟メラクソンを我に返し給ふた」
 と。斯くて以後長き歲月間、その豊富該博なる學問、流暢明晰なる文章、
 濃厚篤實なる品格の三者を以て、其邁果斷なるルーテルの事業を助け
 たるメラクソンは、病全く癒へて再び活動の人となつた。

第四 監督シンプソンの生命救はれたる事

茲に掲ぐるはメソヂスト教會の歴史に於て、その光榮の一つとせられて
 居る監督シンプソンが、死より救はれし一事であつて、此はその事情を
 精知したる監督ボーマンの語れる所である。

余がオハイヲ州マウンテンベルノンに於ける大會に出席して居りし時
 の事であつたが、或日の午後議長たる監督シエーンスは、監督シンプソ
 ンがピツボルグに於て頻死の状態に陥いつて居る旨を知せて來た書

状を一讀し、特に之が爲め祈らんことを大會に請ふた。茲に於て我等
 一同は詭きたるが、纏てカリフォルニアの大説教者テーロール氏は優た
 る祈禱を捧げ、一同は之に心を合せてアーメンと唱へた。余は彼が祈
 禱の始めの部分に全心を以て同情を表して居たが、その後と云ふもの
 は、我心落ち附き來り、その残りの祈禱に餘り多くの注意を拂はず、只そ
 の言葉の優たるを感ずるのみであつた。祈禱終て一同起あがつた時
 余は兄弟の一人に向つて云つた。「監督シンブソンは死に至らぬであ
 らう、余は斯感する」と。斯て一同が祈れる間、我が心中爾く感と來れる
 由を語りたるに、彼も同様の感を與へられたることを告げた。此言其
 所に居たる人々に口より耳へと傳へられたが、居合せたる三十餘人の
 教役者は悉く同様の感を與へられたる旨を語つた。そこで余は手帳
 に此等の事情を書き込んで置いたが、數ヶ月後、監督シンブソンに面會

する時機があつた故、その健康回復のとなつた之に尋ねたるに、その
 は知らぬが、たゞ醫者は全く奇蹟であると云つて居たと彼は答へた。
 彼の語る所によれば、或日の午後、死期の近づきたらん時、醫者は三十分
 斗り、何人もその室内に居らしめずして靜かにして置くべき旨を告げ
 て立去つたが、その時間經つて醫師再び歸り來つて驗せしに、彼は患者
 に於て一大變化ありしを認め、大に驚いたと云ふ。シンブソンは此時
 より、以後追々と肥立て、間もなく再び健康に復し、教會のため、人類の爲
 甚だ有益なる働きをなし續けた。右の如く余は親しく以上の話を本
 人のシンブソンより聞つ、我日記を取出して日を繰り、時を數へて見
 しに、彼の三十分こそは、丁度吾人がマウンテンベルンに於て彼が爲め
 に熱心に祈りつゝありし當日當時にてありし事を發見した。

第五 日曜學校の一组が悉く信者となりし事

嘗て一人の神學生が有た。彼はニューヨーク市なる長老教會の日曜學校で四十人斗の年若き婦人より成れる一組を引受けて居つたが、始めの間は信者は一人もなかつた。然れども彼は凡て其組に屬する女子をして悉く信者たらしめんと、堅き決心を持つて居た。而して之が爲め彼の取つたる方法は甚だ念の入つたるものであつて、彼は日曜日に、牧師が説く所の聖書の教を彼等各人の必要に適當せしめるようにとめられた上、時々彼等を其家々に訪問して、宗教談をなし、その密室に於ける祈禱に於て、彼等の一人一人をその祈禱の主意となして熱心に之れが爲めに祈て居た。勿論一時に彼等悉くの爲めに祈つた譯ではない。場合に從つて、その一人或は二人のために、特に之が悔改の爲に祈禱したのである。或時の如きは、彼が宗教談をなさんとて、そのうち或者を訪ふに當り、先づ之が爲に祈禱せるに、不思議にも、その心中

にその祈禱が聽かれて、目指す人の必ず悔改むべしとの確信を與られた事があつたが、斯くて實際訪問した後の結果は、その豫期せしめられた通りであつたと云ふ。彼は宗教談をなした後、祈禱をさへぐるを以て常として居たが、この祈禱に心から同情を懷くべき事と、この祈禱と共にその身を神に捧ぐ可きとを、相手として居る者に熱心勸告するが例であつた。斯くの如くに祈禱と骨折にて費されたる三四年の結果は、實に驚くべきものであつて、その組のものは順次に信仰の門に入り、殆んど皆な悔改めて基督を信する事となつた。されば其教會に於て聖禮典の執行さるゝ度毎に、一人か二人、彼の組より受洗者を出さぬ事はなかつたと云ふ。然るに此組に屬せしハリエツトてふ一婦人は、始終よくその組に出席はしたが、殆んど常に無感覺であつた。それもその筈、彼女は信者となるまじと堅く決心して居つたのである。ソコ

デ彼の神學生は、他の婦人のためにせるより、二倍も三倍も此婦人のために心と力とを勞したるにも拘らず、彼女は如何なる勸誘にも殆んど無頓着であつた。熱心なる神學生は終にその學業を卒へて教役に入り、他の地方に移りて道のため働く事となり、最早や彼女の爲め教を語るの機會はなくなつた。故にそれより以後と云ふものは、彼女はますます神の道に縁遠くなつたのである。併し熱心にして親切なる彼は時々彼女の事を思ひ起して、之れがために、特別に祈禱を捧げ、神靈の彼女の心を新にし給はん事を願ふて居つた。歲月は水の流るゝが如くに過ぎ去つて、恰かも二十七年後の或る日曜日のことであつたが、彼は自分の任地よりは一千哩も隔てゝ居る所のニエヨークのブルクタン市に於て説教したるが、禮拜が終つて彼講壇より下り來れるとき、中老の一婦人が其所に待つて居つて、突然彼に向ふて曰つた。「失禮ながら

御話致しますが、私は曾て貴君の聖書の組に居た者であります。貴君はハリエットを御記憶でない乎。私は今此市に住居して某夫人と申して居ります。如何でか彼の如くに熱心に、其人の靈を愛し、又之が爲に祈りたりし人の事を忘るゝ事が出来よ。彼は忽ち彼女を認識した。彼は彼女の手を取て二十七年前のうら若き一女子に曰が如く「ハリエットよ、御身は主耶蘇基督を愛する乎」と問ふた。彼に非常の喜を與ふる返事が、彼女の口よりこぼれ出た。彼女は簡單明確に答た。「然り、余は自ら彼を愛すと信ず」と。茲に到りて彼に學びたる凡ての女子は悉く信仰の道に入り、一人も恩みに漏るゝ者はなくなつた。

第六 有力なる牧師が聖靈のバプテスマを蒙りし事

米國東部の一市に非凡の材能を有する牧師があつた。彼の辯論はその論理的精確と文藝的秀絶との故を以て、彼を崇拜せる多くの群衆を

その教會に吸集した。彼は漫に感情に驅られず、度胸が廣く、意志が單明で、品性が潔白單純である所より、自ら解し得た通りに福音を説て居た。彼は非常なる天才を有して居る上、情操厚く詩的興味の濃なる所より、その講壇より説く所も自ら宗教の中心點よりは寧ろその外廓に屬することが多い。そこで彼は好んで倫理を説き、審美を語つた。此等の理由よりして、彼を崇拜する群衆は常に其會堂に充満したるが、悔改めて信仰の門に入る者は甚だ少く、随つて教會の心靈的潮流と云へば甚だ低いものであつた。然るに、此教會員中に、他の教會より羨ましく思はれて居る程なるこの外形の美觀に満足することの出来ない數人の兄弟等があつた。彼等は教會の現状を以て甚だ悲しむべきものとなし、相約してその牧師の爲めに、密かに特別に祈禱を捧ぐることを取極めた。此人々の熱き祈禱は或る時の間、世にも人にも知れずたゞ

隠れたるに鑑たまふ神にのみ認められて居つた。すると或る日曜日のとであるが、牧師は例になく崇嚴なる姿容を以て、講壇に登りて祈禱を捧げ、説教を始めたが、その凡ての調子の一變して、純粹の福音を説ける、心靈的感興の情を漲らしつゝ、痛切に人々に迫りて罪を悔改めて、基督の贖を受けんことを促せる、見る者聞く者をして、悉く意外の感を懐かしめた。加之彼はあからさまに自ら、近頃第二の變化とも云ふべきものを自らの心中に實驗したる事、斯くて彼が宗教的意識も感想も悉く一新し來りて、古き聖書の眞理が新しき力を帯びて理解せらるゝ様になつたと、就中、基督が人間を罪より救はんがために捧げたりし犠牲の難有きこと、如何に大なる罪人と雖も、その罪惡を悔て神の子の救の事業及び中保を信する時は、その凡ての罪の赦さるゝと等、歴々明確になつて來つた事を、彼は涙を漲らした眼と、戦へる唇とを以て語つた。

之を聴き居たる満堂の人々の心は何れも氷の如くに溶された。凡ての人の眼は感動の涙を以て溢れて居つた。併し中にも、その牧師と教會を愛して、日夜彼のため、神の前に誠心籠めて祈りつゝありし彼の數人の兄弟等は、今やその祈禱が聴かれて、その牧師が聖靈と火のバプテスマとを蒙れるを眼前に目撃したる事の嬉しさ有難さ歡喜の情もて胸も張さけん斗り、只管天恩の多大なるを感謝して居つた。此牧師は其後聖靈の能に益されて、彼に接し彼に聴く所の人々に大なる靈的利益を與へつゝあつたが、彼が自分のため數人の兄弟等が特別に祈禱をついで與れた事を知り、又講壇の力の秘訣は之が爲めに祈りする數員があるからであるといふ事を、今更らの如くに悟りたるは、程經て後の事であつたと云ふ。

第七 ジョージ・ミューレル 只祈禱の力を信頼して一大孤

兒院を創立し及び維持したる事

此非凡の人は、曾て獨逸に於て、牧師フランケ(ラ、ガスタス、ヘルマン)が只神の恩寵のみを信頼し、ハレに孤兒院を創立し、非常なる信仰と決心を以て無辜の孤兒を養育せる有様を目撃して、非常に感動し、自らも深く信する所ありて、英國なるブリストル市に一孤兒院を創立したるが爾後彼はその全生涯を通じて、幾萬の人の子を救済教育して、世界の慈善歴史に一時期を畫した。彼が後年に至り、孤兒院創立の趣意として自ら記せるものを一讀すれば、何人とも雖も彼の信仰就中、彼が祈禱の力を信するその信仰の尋常なるものでないことを驚かすには居られぬ。その趣意書中實に左の如き語句がある。

我は神がその僕フランケに與へ給ひし豊かなる待遇を見しによりて自らの靈魂に大なる祝福を蒙りたることを記憶す。彼フランケは單に

活ける神にのみ信頼して一大孤兒院を創立したるが、我は幾度か我眼もて親く彼の事業を目撃観察したりき。是故に我が特に恩寵を蒙りたる此點に於て、我も亦基督の教會に事ふべき者なることを自覺しぬ。その特別なる恩寵とは神の力を信じ、その語をそのまゝに受けて、之に信頼して毫も疑はざることは是なり。……斯くて、我は貧弱なる身にてありながら、祈禱と信仰の力にのみたよりて何人の助力を請求むることもせずして、一の孤兒院を創立し、且つ之を維持するに必用なる資力を得ることあらんには、外は不信者に對しては奇しき神の力と恩を明示する所の證據となる可く、内神の子等に對しては、彼等が此等の事柄を見るによりて、その信仰を堅ふする方法ともなるとあらんと信じ、借こそ、此事業を開始したりき。されば此孤兒院創立の第一理由(若くは此事業の最大目的)は之によりて、神は、我が手許に置き給へる孤兒の

ために、凡てその必用なるものを供給し給ひ、我又は同僚が他人に向つては一切請ふことをせず、只祈禱と信仰によりて、直接に凡てのものを神より供給せらるゝの事實を示し、神は今日も尙ほ誠なるものにして吾人の祈禱を聞き給ふことを證明し、以て神徳を榮め奉らんこと、此れ實に我が當初目的にてありしが、今も尙ほ然るなりと。斯くの如く前後六十年に亘れる彼の大事業は固より博愛仁俠の大精神より經營せられたるものであつたが、此間終始一貫彼の精神の基礎となり、之を支へ、之を勵ましたる者は、彼が祈禱の力を確信したるその信仰であつた。彼は此長年月間一度でも人に向つて弱音を吐いた事はなかつた。前後彼の手の中に落込んだる金の總額は、凡そ一千五百萬圓であつたが、此は悉く彼が祈禱によりて直接に神より得たる所の資力であつた。故に彼は九十餘の高齡を以て此世を辭し去る前自ら

此特別なる事業及び其經營に關して、神の榮をあらはさんが爲めに取
りたる方針につき、大膽に世人の前に告白する事が出来た。彼は世人
に向つて、若し自らが人に向つてその助力を懇求したる一例があらば
それを呈出して彼の誇りを打破せんことを懇望した。彼は物を乞ふた
めに人と語つたとは一度もなかつた。その助を得んが爲に人に書面
を送つた事は一度もなかつた。その六十餘年の長年月の間、時として
は二千の孤兒を、明朝の食物の準備なくして就眠せしめたることも毎
度のことであつたが、然れども彼はその度毎に獨り密室に退いて凡て人
の必要物を知り給ふ全能の父なる神に懇へた。彼は缺乏に際してそ
の手にもてる祈禱の鍵を以て、神の恩寵の座に近寄るよと見てある程
に、その無限なる神の富より彼に托せられたる多くの子供等のため、凡
て必要なるものを悉く取出し來つた。斯くて彼の主宰する食卓に飼

はるゝものは、恰も王侯貴人の家に養はるゝ者の如く、乏しきとなく、常
に豊かに支へられたのである。實にジョージ・ミューレルの事業は、十
九世紀の後半に於ける神の一大奇蹟であつて、不信の沙漠に、懷疑の風
に吹きさらされつゝ、此世をたどり行く神の民のためには、雲の柱、火の
柱である。

以上の七事は、祈禱應驗の事實を例證する者であつて、此の如きは尙ほ
數へ難き程、吾人の聞く所ろ知る所である。吾人は此七例によつて、神
は吾人の祈禱に答へて、時として、その日用の糧を與へ給ふこと、回復の
見込なき病者をも癒し給ふこと、剛愎なる人の心靈をも新にし給ふこ
と、不思議な助けを與て正しき事業を支へ給ふと等を學んだ。勿論此
等の例によりて、吾人は祈禱は何事に限らず悉く聽かれるものである
ことを證明したのではない。吾人の證明したのは、神の正しき御心に

合ふ祈禱は、必ずや神之を聞き届け、吾人をして其目的を達せしめ給ふと云ふ一事である。世には此等の實例を讀み、それは偶然の出來事であつて、必ずしも祈禱の効力と云はれぬと云ふ人もあらふ。併し吾人は信ずる、人荷くも虚心坦懐、此等の實例を讀むときは、その人無神論者にあらざる限り、自から其間に、神人交通の消息の存することを認むるに至る可きを。

第四章 祈禱の道理

(甲) 自然法と神の意志の關係

組
織
の
二
方
面

第四章 祈禱の道理

(甲) 自然法と神の意志の關係

宇宙は果して如何なる者である乎。固より一つの宇宙には相違ないが、吾人は自ら之に兩面あることを認めざるを得ない。兩面とは物質方面と心靈方面である。此く觀察するは自然である。吾人活眼を開きて、この宇宙を俯仰觀察するとせんに、上は日月星辰の運行を始めとして、下は萬物萬事よく整頓し、千秋萬古變ることなく、よくその秩序を保つて居るを見て、之が一面に於ては、自然的勢力若くは法則なるものありて、爾く之を維持發展せしむるを認むると同時に、他の一面に於ては、この物理的法則以外に、深き意匠を以て、天地を經營し、厚き仁愛を以て人類を指導し、終に此等をその完成の域に到達せしむる所の心靈的

勢力の存在するを認めざるを得ないのである。此天地及びその中の萬物萬事は、たゞ物理法則のみによりて、斯く成立し、斯く進歩するものでなく、必ずやその間に、心靈的勢力若くは心意ありて、その物理法則を支配して、之を保持し、之を利用しつゝあることは、吾人心ある者が先入の僻見なく、宇宙を俯仰するとき、直覺せざるを得ざる事柄である。世には自然の單一(Uniformity of nature)及び勢力保存(Conservation of energy)等の假定的眞理を基礎として、心靈界存在を否定し、又は祈禱の無益を主張する者もないではないが、近頃に至りて、有力なる哲學者科學者の中に、此等の眞理は、未だ必ずしも確定せられたとは云ふ事が出来ぬと云ひ、或は假りに此等の眞理が確定せられたとするも、心靈界の存在と自由意志の活動を容すべき餘地は十分にあると云ふ者がある。されば今日の科學は、全然宗教に反對する者ではなく、却つて出来る事なら、之

と相提携して天地の大問題を解釋し、又人類の進善を全ふしようとして居る。されば今日に當り、單に科學を基礎として、無神無靈魂説を主張せんとするものは、頗る時世後れの人と云はねばならぬ。吾人は、前段に、天地萬有を一大組織と認め、之に心靈的と物質的の二側面がありて、互に相關係して居る次第を畧記したが、此の大組織の中にありて、その中心を占めて、活動の原動力となつて居る者は、無論大なる意志を有する者でなくてはならぬ。此は神である。此神は、全能全智にして、宇宙組織の心靈的側面に、その思召を行ふのみならず、物質的側面の中にも、將亦人間萬事の中にも、自由に其の思召を行ひ給ふのである。而して人間も亦意志を有して居つて、自らも小さな神とも稱すべき者ゆゑ、彼もまた其意志を用ゐて、宇宙大組織の中、或る限られたる一部の中に、その自らの心のまゝを行ひ得るのである。

一家の主人がその家族の中に、將たその所有物の上に、自家の企圖經營を心のまゝに行ひ得る事は例とすべきである。廣き世間には、家の主人の心掛けよきが爲め、即ち彼の精神の正しさため、その思慮の深きため、その一家一門は富み榮えて、その風儀整ひ、その人情厚きのみならず、その居宅の結構裝飾より、庭園の配置に至るまで、善を盡し美を盡して居るものが少くないのである。斯くて、主人は、その一身の關係して居る物質的及び心靈的組織の中に、十分に自家の意匠を實行して居るではない乎。斯様に觀察すると、神と人間との關係上に成立つ所の宗教及び祈禱と云ふものが、穴勝不道理、又は迷信事でない事が解つて來る。小き組織の中心をなして居る所の我靈性が、大なる組織の中心をなして居る所の神に交際して、直接にその感化を蒙らんとすること、我靈意がその活動を或る限られたる心靈界及び物質界に逞ふせんとす

るに當り、大なる力と智慧の心意即ち全能の神に結付きて、その指導者くは、佑助を得んとすることは、自然と云はねばならぬ、當然と云はねばならぬ。

嗚呼、神よ鹿の溪水をしたひ、嗚ぐが如く我靈魂も用をしたひあへぐなり、我靈魂は渴ける如くに神をしたう、活ける神をぞしたう。……嗚呼、我靈魂よ雨なんぞうなたる、や雨我が裏に思ひみだる、や雨神をまらちのぞめ、我に聖顔の助けありて、我尙ほ我神を讀めたふべければなり。詩篇四十の三、五

以上は、物質及び心靈二界が、宇宙組織の中に兩立し、又交叉して居る状態につき、畧述したるものであるが、この大體の觀察よりして、祈禱の自然であり、又當然であることが結論せらるゝのである。そもそも祈禱は神と人との間に成立つものであつて、固より最も高尚なる事柄であるが、此高尚なる事柄はその状態こそ一様でないが、下等動物の間に

動物の行動の原形に於ける

も成立して居る。試みに見よ、彼の動物界に於ても、博物學者サー、ウヰ
 リヤム、ドウソンの曰へる如くに、幼き鳥の悲鳴は、その母鳥の情を動か
 し、彼をして遠く翔りて食物を探がし求めしめ、而も自らの食慾をもお
 さへて、その食物を小鳥の許に携へ來らしむるではない乎。又た小羊
 の叫聲は、母羊をその傍に惹き寄せ、寄せる斗りでなく、その乳房をさへ吸ら
 しめ、滴たらしむるではない乎。此の小鳥や小羊の叫聲は、單に彼等が
 自分の自覺して居る缺乏の感を發表して自適するの効果ある斗りで
 なく、然らざれば、永遠無究活動の動機を得ずして、そのまゝ、止みたらん
 親鳥又は母羊の情を動かし、遠方より食を運ばしめ、その乳汁を湧き立
 たしむるのである。心なしと云はるゝ下等なる動物の間にすら斯く
 も行はれつゝ、ある需求供給の不思議なる關係は、遙かに高尚なる神と
 人間との間に成立すべき祈禱の關係を豫期せしむるものではない乎。

(三) 人間
 社會に於ける
 動物の原形

更に人間社會を見よ。實に人間は實際の動物である。彼等は曾に相
 交際する斗りではなく、互に懇求し受授することをせずには居られぬ。
 されば有無相通じ、強弱相助け、同病相憐むと云が、人間の情態である。
 而してこの相互に要求受授するのは何によりて成立するかと云ふと
 一方の者がその缺乏を自覺して他方の者に之が補給を求むるのと、他
 方の者がその懇請に動かされて、同情に堪えずして自ら有する所のも
 のを、自らの不便をも忍びて懇求者に與へてやることである。これで
 世の中は持つゝ行くのである。貸ことあり、借るとあり。貰ふことあ
 り、遣ることあり。助くることあり、助けらるゝとあり。赦すことあり、
 赦さるゝことあり。斯くてこそ人間世界の活動は現出する。人の一
 身の出世も、一家の繁榮も、この相互に貸借授受する關係よりして、實現
 せらるゝのである。今の世は不人情で、人は皆な利己主義によりて生

活して居るとは云ふもの、その不人情も利己主義も時としては他人の懇求熱情に動かされて、否らざれば、貸さぬものも貸し、與へぬものを與ふることが屢々ある。人が其身の缺乏を知りて、之を得んとする心を起し、他の之を有するものに向つて、その志望を言表はし、その助力加勢を得て、身を起し家をたつることは、人間同士の間に行はるゝ、祈禱及びその應酬とも云ふべき者ではない乎。

更に一家庭に於ける親子の關係を見よ。親たる者がその子供の缺乏を知り、之が爲に豫め準備をなすことは、固より當然のことであるが、その日常生活の間に於て、矢張り特に相受授相裨補するの關係が成立し居てる。親は一家の立法者司法者、家族制を立て、其家庭を可つて置く。親は前以てその子供の凡ての必要物を知り、豫め之を設備して置く。そこで子供はその設備の中に、その家法や族制の中に、成長發達

(四)家庭
に行はる
る新
形

する。併しそれ丈では、親子の間の關係状態は言盡されて居らぬ。またそれ丈では、親子の眞愛情は發揮して居らぬ。親が特に與へ子が特に受る所のものが、その中に這入らぬうちは、家庭生活は不充分である、無趣味である。そこで親は其子供が早く成長して自己の缺乏を認め、特に之を親に懇ふる時を待て居る。親はその子が自己の嗜好や天赋を認めて、親に相談して、その方針を定めたり、その事業を經營したりする日の來るを待つて居る。親はその子が自らの相談相手となりて意見などを呈出すること、志望を立て、賛成を親に求むること等を頻りに待つて居るのである。之を要するに親は固よりその子の必要を知りて、之が爲め、豫め十分なる設備をなし置くに拘らず、又その家の常則として守るべき一定の家法家風を定め置くにかゝはらず、子供がその自らの自由なる意志よりして、或る事物を己に乞ふとき、喜びて之に

與へんとするものを蓄へて居るのである。求めずしても與へらるゝもの、外に、求めざれば與へられざるものをも蓄へて置のである。彼は子供の請求懇望によりて、従來の設備を無効にせずして、嚴格なる家法を破壊せずして、よく別にその子女を助け勵ます由縁の精神と方法を豊に有するのである。世の中には曾てその親に向つて特に相談をかけた事もなく、物を請ふた事もないと云ふ子供があらう乎。若しあつたとせば、彼は決して孝子ではない、彼は決して其親を喜ばせることとは出来ぬ。此關係状態こそ、實に親子の間に行はるゝ祈禱及びその應驗と云ふべきではない乎。

以上人間社會に行はるゝ人情に基ける受授、并に親子の間に行はるゝ真情に基ける受授は、それ以上に位置を占むべき神と人との間に行はるゝ受授を豫期せしむるものであつて、祈禱の當然なることを暗示し

(五) 祈禱の數

且つ證明するものと云ふべきである。主基督或時此二點の觀察より祈禱の有効なることを説明せられた。路加傳十一章の初段を見ると左の如く記してある。

また彼等に曰けるは、爾曹の中もし或人夜中に其友へ往て、友よ我が朋輩旅より來りしに供ふべき物なきゆゑ、三のパンを借よと曰んに、内に居るもの答へて我を煩す勿れ、既に門は閉我と共に見曹も牀に在ば起て予るこゝ能はずと云ふ者あらん乎。我汝等に告ん、其友なるにより起て予されども、ひたすら請ふが故に其需に従ひ起て予ふべし。

夜半遠來の友を迎へたる一士人が、その友の饑渴と疲勞を思ひやり、之に十分なる手當を爲さんと欲するも、自ら何物をも有せず、一思再考の末、近隣の友の許に至りて事情を陳べて、僅かばかりの食料を借らんとせしに、相手は睡入り鼻のことで、始めのうちは五月蠅事として取合はざりしも、彼が熱心に動かされ、終にその需に應じてパンを貸し與へ

たる有様は、世間交際の間、吾人が屢々目撃する所の實相を巧妙に寫し出したる者と云ふべきではない乎。その自然の儘にしては滿されずして居るべき來客の空腹は、その自然のまゝにしては永劫戸欄の中より轉び出ることなかるべきパンによりて満足せしめられしが、是はその友を迎へたる家の主人の好意、その好意より發し來れる志願、その志願に動かされたる同情より來るものであるとが解る。イエスは更に語を續けて宣ふた。

爾曹の中父たるもの雖、其子パンを求めんに、石を予んや、魚を求めんに、其に代へて蛇を予んや、卵を求めんに、獸を予んや、然らば爾曹惡者ながら善賜をその兒曹に予ふるを知る。

爾曹惡者ながら、實に人間は我儘勝手な者である。自己の利益のみ是事とする者である。併しながら親がその兒曹を愛する人情は彼を

してその子のために善賜を與ふるを禁せざらしむるではない乎。世の中に他人に對しては不人情、鬼の如き者も、その子故には何事をも行ひ、何事をも忍び、何物をも與へんとする者が多くあるではない乎。そこで主イエスは此事情よりして論斷して宣ふた。

まして天に在す爾曹の父は、求る者に惡賜(善賜)を予へざらん乎。

抑も天に在す愛の神は、人類を子供として撫育し給ふ者なるが故に、人類が自らの不完全と缺乏とを認めて、來りて彼に祈り求むる時は、喜んで之に聽き、その必要なる凡の賜を與へ給ふのである。自然的勢力及法則を過信する者は云ふ、宇宙には原因結果の自然的必然的理法が設備せられてある。故に人は之によりて自ら戒め自ら教へて、凡てその幸福安全を助くべき筈である。この原因結果の理法の外に、神なる者がありて、人間の要求懇願を聽きて、之を助け之を導くとは、自家撞着の

話である。斯る人は、結局神を以て、その仁愛の至情人の親たるものに及ばずとなし、亦彼が自ら造り出したる自然の法則によりて、自己の自由を束縛する者、その實際に於ては自己を自己の造りたる世界の外に放逐して、此の世界の運命に向つては自ら一指を染むる事も出来ないう者となさしむるものであつて、その全能全智の聖徳を不完全極まる者とならしむる者である。一家の主人がその家を治むる程にも、此世を治むる能はざる者と彼をならしむる事である。基督が吾人に傳へたる天の父は決して斯くの如き者でない。神はその設け給へる自然法あるに拘らず、原因結果の關係を人事百般の間に行はれしめつゝ、あつてに拘らず、此等の外に、又此等を用ひて、人類が己に求むるものを其聖き賢き御心に善とし給ふ時は豊かに之に與へ給ふのである。之を要するに、自然的法則及び勢力なるものを以て、永遠より永遠に至

るまで自存して居る所の勢力となし、天地の間何物と雖も之に抵抗する能はず、凡そありとあらゆるものは、無機物も有機物も、皆な悉く其支配のうちに籠らるべしと信ずるものは、無神論者唯物論者であつて、彼は勿論心意の存在も自由意志の存在も之を認めぬ故、彼に取りては祈禱は全く無意味にして、憐むべき迷信に相違ないが、自然的勢力及び法則なるものを以て、神が自然界物質界に於て萬物を支配し給ふ行動の秩序にすぎず、換言すれば、自然法は神を離れて自存するものにあらず、神がその御心にて定め給へる萬有を維持進歩せしめ給ふ一定の仕事方たるにすぎず、されば物質界の法則なるものは、神を束縛して何事も行ふこと能はざらしむる者でなく、却つてその自由自在なる聖意に従つて、適宜に支配利用せらるゝ者である、斯く觀じ斯く信ずる所の吾人に取りては、神が吾人の祈禱に答へ給ふことは、不自然どころでなく、

却て自然適切を極めて居る者である。抑も人間の精神意志が、心靈界物質界を通じて有力なる活動を選ふし、否らざれば、決して永久見ること能はざる多くの結果を現實せしむるに相違ないとするれば、人間の要求懇願によりて宇宙の大意たる神が、彼等の爲めに萬物萬事を働かしめて、彼等を益せしむること所謂自然法と稱へらるるものを破らすして、彼等の希望を達せしめてやると云ふとは、必ずしも出来難き事ではない。否な神の全能全智全愛の聖徳は、吾人をして斯く信せざるを得ざらしむるのである。實際人間の自由なる意志が、不思議なる妙用もて法則や勢力の上に働きて、物質の形體性質等を幾様にも變化し得るが如くに、神の意志は更に不思議なる妙用もて心靈物質二界の中に自由なる活動を選うして、彼を愛する者の爲に働きて益をなさしむるとは頗る順當と云ふべきである。抑も自然界は神と離れて存立し得べ

き者ではない。自然的勢力は或意味で云へば神の活動に外ならぬ。使徒パウロがギリシヤ人に向つて主張したる神は、實に超自然的である。人格を備へて天地と離れて存在する者である。れども、亦天地自然の中にも活かし給ふものである。彼は至高の天に在し給へども、亦地上の人心の中にも活動し給ふ神である。曰く、

夫れ宇宙と其中の萬物を造り給へる神は、是天地の主なれば、手にて造れる殿に住たまはす、且衆人に生命と氣息と萬物を予たまへば、物に乏しき事なし、人の手にて事らるゝ者に非ず、又此神は凡ての民を一の血より造り、悉く地の全面に住せ預じ、め其時と住こころの界を定め給へり、此は人をして神を求めしめ、彼等が或は擯棄するることあらん爲なり、然ども神は我儕各人を離るゝこと遠からざるなり。それ我等は彼に頼りて生きた動きたまた存ことを得るなり。行傳一七の二四―二八

斯の如く、吾人は神が自然界の中に働かし給ふて、上は日月星辰の大より、

下は一木一草の微に至る迄之を支配し給ふことを信ずる如く、人間界の中にも或はその心靈的領内に於て、或はその物質的領内に於て、國家として、團體として、個人として、吾人各自の上に、又中に、奇しき支配を及ぼし給ふことを信ずる者である。斯くては、吾人の誠意誠心より出る所の祈禱に、彼が御心を傾け給ひて、之に凡ての善き賜を分け與へ給ふことは、聊かも不都合でない。既に人間同志の間、就中親子の間に、此事がある。矧んや在天の父なる神は、能力と智慧に富み給ひ、慈みと愛に富み給へば、豊なる恩寵をもて、吾人の祈禱に報い給ふことは當然である、勿論である。

第五章 祈禱の道理

(乙) 神の完全と人の意志の関係

誤解のたるる
神の完全
全疑の原
惑の疑

第五章

祈禱の道理

(乙) 神の完全と人の自由意志の關係

此點に於て疑惑を懐くは、無信心者と云はんよりは、寧ろ或る種類の宗教家である。就中智識の方面に偏重したる基督信者には此疑惑を懐いて居る者が多い。抑も神の完全、凡ての點に於けるその完全の徳と能は、天のうち地の上の萬物萬事の上に圓滿に働きて、凡ての事をして悉く其聖意の如くならしむるが故に、其間に人間の祈禱を開きて、事物を料理鹽梅する餘地のあるべき筈がないとは、此疑惑の本體である。由來基督教にて傳へられたる全能全智の神は、餘りに大にして尊く、餘りに賢くして正しく、但すが故に、愚昧にして小弱なる賤しき人間如き者の企圖や事件に關係し給ふが如きとはあるべき筈でない。凡て

の事を、過去現在未來の區別なく、同時に知悉し給ふ神は、その完全の智識と聖意のまゝ、世界の事、人間の事を豫定し給ふのである。其間に愚かなる人間の意見を聞いて其方針を更る餘地はない。偶像教で信する神で云へば、此點の解釋は造作もない。彼等は不完全なる神を信する、そこで郷社だの村社だのと云ふものを祠つて居る。一ヶの町にも村にも、それ／＼別々なる氏神護神がある事として見れば、その神は丁度名主や村長の如きものであるから、その神々が村内の人々を護り助け、又彼等の祈禱に應答するとして寸毫も不似合の所がない。が、吾人の信する神は、その聖徳力能無限測るべからざる者であつて、その御眼より見る時は、此太陽系ですら、大海の一滴に過ぬのである。まして渺乎たる地球をや。まして子供の戯事に似たる國家社會をや、一家一身をや。其至微至小なる國家社會の事や、一身一家の利害を以て、彼の至大

至尊の神聽を煩はさんどす、餘に大膽と云はねばならぬ、餘に不似合と云はねばならぬ。何人と雖も少しく實着になつて、彼我の分際を考て見れば、兎ても祈禱など出來得べき等のものでない。且つその神は諸徳に於て完全なりとすれば、その智慧と力能に於ても無論完全なるに相違ない。其經營措置に於ても無論完全なるに相違ない。既に然りとせば、天地の大は勿論の事として、人間一切の出來事までも、彼が豫め之を料理鹽梅し、其創造の當時に於て經營し給へるものを、年月の経過に従つて着々實現せしめ、其間にありて、些の落度の有るべき筈はないのである。彼は其聖意によりて豫定せる凡の事を、凡ての事物の上に行ひ給ひつゝあるのである。基督も教へ給ふた。「爾曹の父は求はざる先に其需用物を知給へば也」と。されば神は吾人の萬事を、最も賢く、最も正しく、經營し、支配し、執行し給へば、吾人たる者の分限は、萬事を

神の知の行の態
人の自由の爲の關係
豫人の由の狀

その睿智に任せ奉り、只從順服從、出精勉強もて、嗚かす求めず、自然の勢
力や法則を重んじ、之を利用して其生活を營むべきである。漫に自個
の思案より、斯様に彼様にと志望して、或は祈つたり、願つたりすること
は、神の完全なる智能に疑惑を懐くのである。完全なる神の政治に無
用の差出口をなすのである。神の定め給へる大經營を改造せんとす
るのである。心さへ眞の道に合は、神は必ず祝福を豊かに注ぎ給ふ
のである。所謂働くことこそ祈るとである。之が祈禱に對する疑
惑であつて、此思想が、云はず語らず、今日或種類の基督信者の心中を支
配して居る。そこで彼等は祈禱を宗教生活の要件と考へて居らぬ。
さらば、彼等は、禮拜や祈禱を一切無用として排斥する乎と云ふと、さう
でもない。要する所、彼等は下の様に考へ込で居る。公會に於る禮拜
讚美は、所謂神徳に對する神民の頌榮であつて、神の威光に對する正當

なる租税至當なる祝謝であるから、宗教家たる吾人が之を勤むるは當
然である。又密室にたて籠りて神明の聖徳を仰ぎ、沈思黙想の修養を
積むことも、宗教生活の一要素である。然れども、國のため、家のため、將
た身のために、特別なる祝福や天助を祈願するが如きは、全く無意味で
不必要である。彼等は心竊かに斯く判断して居つて、祈求懇願の意
味に於ての祈禱には、極めて冷淡無頓着である。
之を要するに、神の完全なる政治と人間の自由なる意志の關係こそ此
疑惑の根底に横はつて居る所の難題である。人間の我儘にして勝手
なる自由意志より發し來るものを、一々取り立て、神その政治を行ふ
とする時は、兎ても完全なる經營の行はるべき筈はない。故に神は人
間が如何に思考し、又如何に企圖するに頓着し給はず、願はうが願ふま
いが、それには少しも御構なく、古往今來たゞその聖旨のまゝを宇宙と

萬物の中に行ひ給ふのであると、是れその論断である。然れども此思想は誤謬を含むものであつて、神の完全の聖徳を正常に理解して居ない所から起つて來たものである。従つて吾人に之を辯ずるの道がないではない。抑も神は人間を自主自由なる者として造り給へるではないか。自らの撰擇によりてその生死存亡禍福成敗を招致し得べき者とし給へるではない乎。彼は人をその自己の成敗存亡に關し、自らの責任に當るべきものとせられたではない乎。彼は自らその思慮分別を以て、惡しきものを避け、善きものを取り、凡て自らを幸福有益ならしむべきものを撰擇適用して、身を立て、家を起し、國を富ますべく、彼等を造り給ふたではない乎。斯く人間をして自主自由にして、自己の存亡榮辱に關する責任を自ら負はしめ給へる神の經理は、決して神の完全なる徳性を毀損するものではない。否、此が實に神の大能妙智の

發現ども云ふべき所である。人間は神御自身の像に似て造られたる者であるが故に、自らの意志によりて、自ら凡ての行動を司るとが當然である。その醜辱に出ると光榮に終るとは、神の定め給ふ所と云ふよりは、寧ろ自ら好で招きたる事柄である。然らば神は人間の利害に限り、經營企圖の勢を取り給はななだかど云ふに、然らず、彼はその全智の妙用により、凡そ人間の自由に思念し、自由に經營し、自由に招致すべきものを豫知し給ひて、之に従て自らの經營を豫定設備し給ふたのである。斯く彼は人間の意志の活動を豫知して、その希望に應ずべく萬物を萬事を豫定せしめたりとせば、祈禱に於て現るべき人の意志をも豫知して、豫じめ之が爲めに特に豊かなる設備をなし給へりとするのが、何故不條理である乎。抑も神は人間の差圖に従つて、天地の經營をなし給ふものにあらず、又その祈禱に餘儀なくせられて、その方向を變更す

る者にもあらず、たゞ神は全智全能なるが故に、凡ての人の祈禱を前以て知り給ふて、その正しきものに答を與へ給ふ様に前以て萬事を規定し給ふたのである。乃ち祈禱をその大經營中に於ける一の實力として人間に授け給ひ、且つ之が爲に設備し給へるのである。苟くも人間の祈禱にして神の御心に合ふものならんには、之に應驗あらしめ給ふは、彼の經營の一部分である。故に祈禱をせぬものは自らを益し得べき一大實力を棄るのであつて、恰かも庭内に豊かなる水脈を持つて居りながら、その水脈を利導することを知らず、その地内に鑛地を持つて居りながら、その金銀を採掘する方法を知らぬ人と同じことである。神はその完全なる政治のうち、人間が自らの智慧と力能とを以てその水源を探りて之を取り出し、その鑛地を發見してその金銀を掘出し以て自己を益し他人を利し得るよう、に豫定し給へるが如く、亦彼は凡

て信仰によりて、神の無限の恩寵と能力とを仰ぐ心より發する所の祈禱に對して、之に大なる恩賜を加へ給ふべきを豫定し爾く設備し給ふたのである。されば使徒ヤコブは左の如く云ふた。

爾曹は求めざるによりて得ざるなり、爾曹求めて得ざるは爾曹欲のためによりて得ざるなり。爾曹は求めざるによりて得ざるなり、爾曹求めて得ざるは爾曹欲のためによりて得ざるなり。

基督の啓示に従へば、この天地間には、祈禱に因てのみ得らるべき者が尠くないのである。眞心より出る正しき祈禱には、主觀的效果は勿論として、客觀的應驗をも與へらるゝのである。神の完全と人の自由意志との關係を、以上の如くに判断すれば、祈禱の効力を承認すること、人間の意志をして神の行爲を支配せしむるものでないことが明白である。併し此の一點に於て、讀者が尙ほも明白なる理解に達せんが爲めに、吾人は左の二つの説明を掲ぐることを頗る有益と考ふ。その前

者はエル、ダブリウ、ベイコン氏の設けたる想像の一例であつて、後者はダブリウ、ダブリウ、バトン氏によりて傳へられたる實際の事實談である。讀者にしてこの二説明を玩味する時は自ら前陳の要領が會得せらるゝであらふと信ずる。

甲、想像の一例

人あり二子を持ちたるが、その一人は賢く他は愚かなりし。父は兩人を學校へ入塾せしめ置きしが、來らんとするクリスマスには、彼等に贈物を送るべき由の約束をなしたり。而して彼等に課したる條件は其前週、父をして約束を思ひ出さしめんが爲めに、書面を認めて彼に送ることにてありき。此約束をなせる後間もなく父は遠國へ往きたれば、その約束に従つてクリスマス朝彼等に贈物を得せしめん爲めには、勢ひ子供の手紙の到着せざる以前に之を發送せればならぬ事となれり。茲に至りて父は自ら聞へらく、余二子に對して自ら爲すべきを知れり。長子はその性質誠實にして時期を守る正確なり、故に彼に向ふて贈物を送附するは當

然なり。次子は怠惰善忘を性とす、彼は我言を信ぜざるなり、故に彼は我に書を読めざる事亦明か也、故に我は彼に向つては、彼が我より贈物を得ざるは、彼が我を信ぜず、又書を認めざるが故なることを説き示せる書を送らんのみと。斯くてクリスマスの前週となるや、長子は父に送るべき書を読み始めたるに、次子之を愚弄して曰く、余時間表を讀みて最早や書を認め送ることの無益なるを知りたり、我等への贈物のクリスマス朝此所に到着せんためには、我等の書の父に達する以前にその贈物既に汽車積となり居らざるべからず。若し果して然りせば今にして、何萬通の書を読み送るとするも何等の効用をなすべからずと。斯くて彌々クリスマス朝となりぬ。而して只一包の郵便物のみ、彼等の寄宿舎に配達せられたり。而かも弟は、その父が長子よりの書を得ざる前に發送せし者なるが故に、總て自分の許にも同様に贈物到來すべしと望みまらしに、贈物は來らずして一書のみ來りぬ。其書は彼の不信仰を警めさせし所のものにして、彼を失望落胆せしめぬ。然るに親切なる物理學専門の教授は、最近發行の鐵道案内一冊を携へ來りて之れを彼に示し、彼が贈物發着に關して算定したる所は正確にして毫も非謬すべ

乙

實際の一例

き點なきの理由を以て、類りに彼を慰藉したり。

米國東北部の一市に、幾何の資産を有せし一貴婦人ありけり。彼女はその死に先づ二三年自ら遺産處分に關する遺書を認め置きぬ。彼女はその遺産を最も賢く處分せんことを欲し、その親戚朋友中、貧乏者につきては特に意を用ゐたり。斯くて五百弗づつの片身の分配を指定したる人々の中、數年間たゞ四部の何れに轉居せりと噂せらるゝ外は音信不通なりし一婦人ありけり。貴婦人の死後遺言の執行者たる彼女の兄弟は、それ〴〵遺言通りにその片身金を分配したるが右の一婦人につきては、種々問合せたる末、漸く其人のカリフォルニア若しくはオレゴン地方に轉居せることを知り、直に書を認めて片身金の届け方を問合せやりしに、數ヶ月経つても何等の返事來らざりき。因て彼は更に種々問合せて漸く彼女がチハイオ州に住居せることをつき留めたるが、其時時墨きに發送したる書狀は廻りくても多くの附箋に纏はれて差出人の手許に歸着したりき。茲に至りてもごひしく感じつゝありし彼は、直ちに五百弗の爲替券を封入したる書狀を發送

して、久しく氣懸りとなり居りし姉妹の遺産處分を完了したり。此書を得て彼女が直ちに之に答へたる書面の一節を抜抄すれば、實に左の如し。
余が御身の書狀によりて與へられたる喜悅の狀は、筆紙にては陳べがたし。片身の贈物は時最もよき時機を以て余が手に落ちぬ。されば余は是は神より送られたるものとして、只管彼を讚美するなり。思ふに御身は基督信者なるべし、因つて御身の基督教的生活に於て、新しき獎勵を得られん爲めに、祈禱應驗の我が實験を申上ぐべし。先週の金曜日の夜こそ、我身五百弗の金なくては、進退如何とすること能はざる窮境にさしつまれるものから、一さまじりも眠ること能はざりき。委細の事情は畧することとして、只その要點を云はんには、暗黒の境遇より我を助け出さん道を見得ずして、余は心配の餘り一睡も成らずして一夜を明したるが、翌日となりて、余は我が重荷をば主に委れ奉らんを決心し、今日こそ必要の助けを送り給はんことを熱心に祈り求めぬ。余は誠實にその事をなせり。斯くて斯終れる時、我心不思議ほど落ち附きぬるを自覺しぬるが、土曜日一日は終日少しの憂慮を懐かずして、致やせしに、其日の夕方御身の書狀こそは余の手に達しぬ。斯る實

驗を有する身の如何でか天父を信じ、萬事を之に委れて安心せざるを得べき。天使の如き我母は今や彼の黄金して敷きつめたる天城の市街を歩みつゝ、その地に遺せる子供等が信仰によりて世を渡り且つ「父なき子供を我に委れ」と曰給へるものに萬事を依頼する有様を見下して、如何でか喜び樂ますに居らるべきぞ。「我が父母我を棄る時エホバ我を迎へ給はん」とは實に眞にてあるなり。

この二つの例によりて、吾人は預言者イザヤによりて傳へられたる神語の適例を見るべきである乎。その言に曰く「彼等が呼ばざるさきに我答へ、彼等が語りをへざるに我きかん」と。神は吾人が祈らざる前に吾人のなくてならぬものを知悉し給ふ、又吾人が祈るべきを豫知し給ふて之が爲めにその應驗を準備し給ふ。吾人が神の完全の徳性を少しも傷損することなくして、祈禱の應驗の確實なることとして信じ得らるゝ次第は、之によりて明白である。

吾人は神の設備し給へる自然的理法を貴重し、利用して、自然的に多く

の祝福を受くるが如く、亦彼が吾人の天性中に植ゑつけ給へる祈禱の天性により、又主基督の實例と約束命令とにより、神に祈り求めて神が自然的又超自然的に與へんとして設け給へる多くの祝福恩恵に與ることを得るのである。祈禱の應驗ある事は少しも自然法を破壊するものでない。祈禱をさへ給ふて特に善賜を與へ給ふとは、少しも神の聖徳と權能を損傷するものではない。否な祈禱こそ實に天父が他の事にもまさりて吾人に希望し給ふものである。されば希伯來書の著者は云ふた。「信仰なくば神を悦ばすこと能はず、蓋神に来るものは神あるを信じ、且神は必ず己を求むる者に報賞を賜ふ者なるを信すべければなり」と。祈禱は神を喜ばせ奉るものである。故に正しき祈禱、主の名によりてさへげらるゝ眞心よりの祈禱は、必ず聽かれ、必ず應驗を與へらるゝのである。故に主は弟子を獎勵して左の如く宜ふた。

汝曹今まで我名に託て求たることなし、求めよ然ば受けん、而して用曹の喜び満つべし。 約一六〇二四

宗教の中心事實として祈禱終

明治四十一年十月八日印刷
明治四十一年十月廿五日發行

定價金二十圓

著者 星野光多

發行者 福永文之助
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷者 村岡平吉
横濱市太田町五丁目八十七番地

發行所 警醒社書店
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
振替貯金五五三
電話新橋一五八七

印刷所 福音印刷合資會社
横濱市山下町八十一番地



不許
複製

再版 基督教思想林 朝の巻

一名日毎の學び 四百二十頁 定價 金七十五錢

本書は泰西思想家の深遠なる言説を以て、斯道の眞理を闡明せるものにて、日毎に聖書の題詞一二節を説明するに、名家の良思聖想を以てしたる者なり。巻尾に附録したる三種の索引は、書中の思想を應用せんと欲する者をして囊中物を探す如くならしむ。思想家百七十餘人一覽表は之が應用に當り特に思想の價値をます者と云ふべし。説教家、演説者、日曜學校教師諸君には、坐右缺くべからざる良友なり。

再版 基督教談叢 夕の巻

一名日毎の教へ 四百頁 定價 金七十五錢

本書は宗教的佳話美談を以て、斯道の眞理を説明せんと試みたるもの、一年三百六十五日、日毎に聖書本文を掲げ、之を説明するに一二適切な事實談を以てする者にて、その體裁「思林」と同じとす。書中掲載せる談話、無慮四百餘項は説教者、演説者、日曜學校教師諸君のため、材料の一小倉庫たるべし。巻尾に附録したる二種の索引の便利なるは勿論とす。

星野光多君修養三書

星野光多君修養三書

新版 基督教通觀 聖日の巻

四六判五百三十頁 定價 金壹圓

- 第一、序編 ○第一、宗教の必要○第二、宗教の資格○第三章宗教の活用○第四、宗教の眞價○第五、光暗の衝突。
- 第二、概論篇 ○第六、基督教の三大要素○第七、神の準備と人の準備○第八、基督教の使命○第九、人生の目的と基督教○第十、基督教と生活○第十一、基督教と現在境遇○第十二、基督教と人格。
- 三、教理篇 ○第十三、神(其一)○第十四神(其二)○第十五、人○第十六、基督教(其一)○第十七、基督(其二)○第十八、基督(其三)○第十九、救罪の機能○第二十、贖罪論○第二十一、聖靈(其一)○第二十二、聖靈(其二)
- 第四、基督編 ○第二十三、基督問題○第二十四、基督の出生○第二十五、基督の年齢○第二十六、基督の要求○第二十七、基督の死狀○第二十八、基督の復活○第二十九、復活の能力○第三十、寶石として基督○第三十一、要石として基督○第三十二、基督の榮。
- 第五、生活編 ○第三十三、新生活の始終○第三十四、生活の目的○第三十五、吾人の共働者○第三十六、生活の二種類○第三十七、聖徒の自由○第三十八、聖徒の喜樂○第三十九、聖徒の満足○第四十、聖徒の二特質○第四十一、日毎の十字架○第四十二、始終一貫の精神。
- 第六、教會編 ○第四十三、教會の成立○第四十四、教會の特質○第四十五、教會の模形○第四十六、教會の生涯三段階○第四十七、教會の繁榮と其原因。
- 第七、傳道編 ○第四十八、傳道の精神○第四十九、傳道の實力○第五十、傳道の材料○第五十一、傳道の成功○第五十二、傳道の責任及び利益。

258
861

基督教叢書

● 基督教叢書 ●

(編輯君多光野星)

- 福音書の著者 山鹿旗之進君著
- 舊約文學一斑 今泉眞幸君著
- 基督の比喻 八濱徳三郎君著
- 基督教辯證論 有馬純清君著
- 基督教本原眞理 露無文治君著
- 現世と未來 武本喜代藏君著
- 靈魂不滅論 柏木義圓君著
- 耶穌の三大觀 星野光多君著
- 現世生活 山田寅之助君著
- 聖書の價值 高橋卯三郎君著

定價 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊
郵稅 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊 各一冊
錢 十 二 金 冊 一 各 價 定
錢 四 金 冊 一 各 稅 郵

8
8